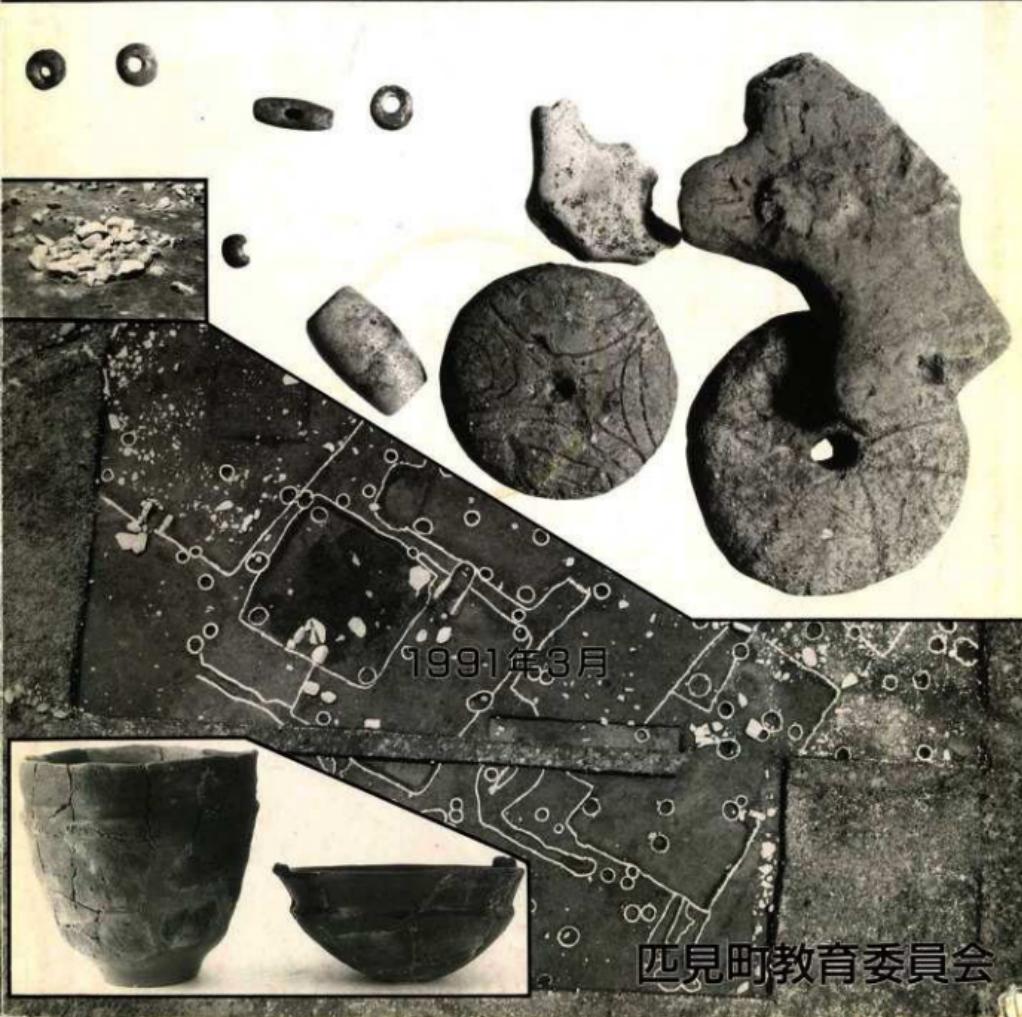


水田ノ上A遺跡
長グロ遺跡
下正ノ田遺跡



四見町教育委員会

水田ノ上A遺跡
長グロ遺跡
下正ノ田遺跡

1991年3月

匹見町教育委員会



水田ノ上遺跡周辺の鳥瞰(矢印方向は磁北も示す)

例　　言

1. 本書は島根県益田農林事務所の委託を受けて、匹見町教育委員会が平成2年に行った匹見地区
県営圃場整備事業に伴う、水田ノ上A遺跡・長クロ遺跡・下正ノ田遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は島根県教育委員会文化課の指導と協力を得て次のような体制で実施した。

調査指導	島根県教育委員会文化課	
	鳥根大学法文学部教授	田中 義昭
	山口大学人文学部助教授	中村 友博
	広島大学文学部講師	河瀬 正利
事務局	匹見町教育委員会教育長	平谷 勉
	匹見町教育委員会教育次長	渡辺 隆
	匹見町教育委員会社会教育主事	佐々木厚造
調査担当者	匹見町教育委員会文化財保護専門員	渡辺友千代
調査補助員	柳田悦子、大谷文子、藤村妙子	
調査参加者	栗田 定、三嶋忠俊、森 清、森脇雅夫、沼田吉雄、原田頼二 落田政人、渡辺 照、斎藤直行、大谷 実、山崎リマヨ 森脇一枝、斎藤百合子、長谷川時子、溝田久子、斎藤君子 渡辺登美子	

3. 発掘調査に際しては、益田農林事務所の水 壮・堀野 章氏をはじめ、土地所有者、地元の方々
に終始多人な協力をいただいた。また、遺物整理にあたっては、立命館大学の家根助教授、広島
県立美術館の村上勇氏、島根県教育委員会文化課の松本岩雄・足立克己・柳浦俊一氏らのご指導
を得た。ここに感謝の意を表したい。
4. 今回の調査では、柱穴状遺構-P、特殊遺構-SX、上坑-SK、溝状土坑-SIと略号した。
5. 紙数に伴って、図面・図版を省略したものもある。また本書の掲載図面等は、渡辺友千代・柳
田悦子・大谷文子・藤村妙子が各分担し、執筆・編集は調査員渡辺が、内田律雄主事の指導のも
とで行った。

目 次

第1章 発掘に至る経緯	(渡辺 隆)	1
第2章 石ヶ坪・水田ノ上そして長グロ遺跡	(河瀬 正利)	2
1.はじめに		2
2.匹見町の位置		2
3.縄文時代のムラ——石ヶ坪遺跡		3
4.縄文時代の祭りの場——水田ノ上遺跡		5
5.歴史時代の農村——長グロ遺跡		6
6.原始、古代の文化交易路		6
第3章 水田ノ上A遺跡	(渡辺友千代)	9
第1節 位置・立地・歴史的環境		13
1.位 置		13
2.立 地		13
3.歴史的環境		13
第2節 調査の概要		17
1.はじめに		17
2.調査区の設定		17
3.層序と遺構		19
第3節 遺 構		20
1.配石の概要		20
第4節 出土 遺物		29
第4章 長グロ遺跡	(渡辺友千代)	65
第1節 はじめに		68
1.経 緯		68
2.位置と立地		68

第2節 調査の概要	69
1. はじめに	69
2. 調査区の設定	69
3. 層序	69
第3節 造構	70
1. 住居址	70
2. カマド址	78
3. 住穴・土坑	78
第4節 出土遺物	82
1. はじめに	82
2. 出土遺物	82
第5節 小結	88

第5章 下正ノ田遺跡	(渡辺友千代)	101
第1節 はじめに		104
1. 経緯		104
2. 位置と立地		104
第2節 調査の概要		104
1. はじめに		104
2. 調査区の設定		104
3. 層序		104
第3節 造構と出土遺物		107
1. 造構		107
2. 出土遺物		112
第4節 小結		118

第6章 島根県美濃郡匹見町出土の青銅器	(松本岩雄・岩永省三)	125
1. 発見地の概要		125
2. 青銅器の観察		126
3. 結語		127

第1章 発掘に至る経緯

島根県美濃郡匹見町大字紙祖に所在する水田ノ上A遺跡は、平成2年度に行った県営圃場整備事業とともにやって行われたものであります。

調査の発端は、昭和57年本地点の西側約100m地点を（県道六日市匹見線沿）宅地に整備中に発見されたことに始まります。その後、島根県教育委員会文化課の松本岩雄氏の協力で調査され、勾玉・円盤型線刻土製品などの呪術具をはじめとし、今回注目された立石あるいは配石・土坑などの遺構が発見されたものであります。

したがって、本地点は周知の遺跡として認定されておりましたので、県営圃場整備事業に先立ち平成元年度に国庫補助事業として詳細分布調査を実施いたしました。調査の結果、縄文後期末から縄文晩期にかけての貴重な遺物をはじめとして遺構なども出土しましたので、今回の本格調査となつた訳であります。

また、本報告しております長グロ遺跡・下正ノ田遺跡は、水田ノ上A遺跡と同年度（平成元年）に実施した詳細分布調査で確認されたものであります。今回調査したところ、両遺跡では奈良時代の遺物・遺構が多く発見され、当時代の生活の様態を知る上にも貴重な遺跡であります。したがって、本調査した3地点の遺跡は、盛土工法で保存し、後世に伝えるべき方策を講じておりますので、皆様方の一層のご理解をいただきますようお願い致します。

なお調査においては島根県教育委員会文化課をはじめとして、島根大学の田中先生、山口大学の中村先生、とくに広島大学の河瀬先生、共述していただいた松本岩雄・岩永省三先生の玉稿には感謝致します。最後になりましたが益田農林事務所耕地課、あるいは作業に携わった多くの皆さんにお礼を申しながらご報告とします。

（渡辺 隆）

第2章 石ヶ坪・水田ノ上そして長グロ遺跡

1. はじめに

1989年6月・12月と1990年6月の3度、島根県美濃郡匹見町教育委員会の渡辺友千代氏からの依頼で匹見町紙祖の石ヶ坪・水田ノ上・長グロの3遺跡を現地調査する機会を得た。いずれの遺跡も紙祖川が形成した河岸段丘上に立地しており、石ヶ坪遺跡では縄文時代の堅穴式住居（規模、構造などは必ずしも明らかでない）をはじめ、貯蔵穴、土坑、集石遺構など集落に関係する遺構群と縄文中期から後期にいたる多量の土器と石器類が出土していた。

また、水田ノ上遺跡では、径1m前後の円形をなす集石遺構が多数検出されていた。しかもそれらが環状列石状に環状にめぐっている様子が窺われた。このほか、縄文後期後半から晩期にかけての土偶、土版、硬玉製管玉、碧玉製小玉、滑石製小玉といった呪術品、装身具類や多量の土器、石器類が出土していた。

さらに長グロ遺跡においては、方形の堅穴式住居が10軒以上が発見されていた。いずれも住居の壁の一辺には石組みのカマドが付設されていた。住居跡出土の須恵器、土師器から、奈良時代から平安時代の集落跡と推定されるものであった。

匹見町域においては、この数年考古学の発掘調査や遺跡分布調査が継続して実施されており、新しい遺跡や遺物の発見も相次いでいる。なかでも匹見盆地周辺には保存状態の良好な縄文遺跡や歴史時代遺跡が集中的に分布していることが明らかになってきた。これらは縄文時代の集落構成や生産活動、さらには歴史時代の農村の集落構造などの研究に貴重なる資料を提供するものである。

ここでは、匹見町の遺跡の3度にわたる現地調査によって感じた2、3の問題点について述べてみたい。

2. 匹見町の位置

島根県美濃郡匹見町は、中国山地の西端の冠山山地の北西側に形成された山間の地域である。冠山山地の南側（瀬戸内側）は、冠山（1,339m）や延石郷山（1,177m）、恐羅漢山（1,346m）、広見山（1,186m）、収地山（1,309m）など山頂部に広い平坦面をもつ高位の芸北台地とその南にひろがる広大な平坦面をもつ中位面の佐伯台地とからなり、比較的緩やかに瀬戸内へ下降する。一方、冠山山地の北側（日本海側）は、高位の芸北台地から急勾配で下降して日本海にいたっている。こうした冠山山地を形成する高位の台地と中位の台地は、もともと一つの繋がりであったものが、中国山地の隆起とともに断層谷の浸食によって分離したものであるといわれている。日本海へそぞぐ高津川の支流の匹見川や紙祖川、七村川、また瀬戸内海へ流れる太田川やその支流の流路から察え

るようすに南西から北東にのびる断層がみられ、この断層谷の浸食によって冠山川地が形成されたことがよくわかる。

匹見町内の遺跡もこうした断層谷にそって分布している場合が多い。とくに河川と河川が合流し、周辺に広い河岸段丘の形成されている匹見、紙祖地区に集中して分布する傾向が強い。古くから人々の生活の場が地形や自然環境の生成と深い関わりをもつてることを示すものであろう。

現在、匹見町内では約40箇所の原始古代遺跡が確認されている。このほか中世の山城跡や近世以降の製鉄遺跡などを含めるとその数は100箇所をこえている。ほとんどの遺跡は、いくつかの時代にわたる複合遺跡であるが、この地域の遺跡を特徴づけているものは、石ヶ坪遺跡や水田ノ上遺跡、新樹原遺跡などの縄文時代の遺跡と長グロ遺跡や上井分遺跡といった歴史時代の遺跡である。⁽²⁾ なかでも石ヶ坪遺跡や水田ノ上遺跡などは縄文時代の集落構造や生産諸活動、精神生活などを知る上できわめて良好な資料を提供するものであり、その重要性は言をまたないところである。

3. 縄文時代のムラ——石ヶ坪遺跡

石ヶ坪遺跡は、紙祖川と七村川の合流点に近い河岸段丘上に立地している。町内に所在する新樹原遺跡、半山遺跡などの縄文遺跡もこうした川と川の合流点付近に位置するものが多い。中国地方の縄文遺跡の場合も例外ではない。こうした場が縄文時代において生活を営んでいく上で最も適していた場であったからにちがいない。縄文時代の生活は、植物採集、狩猟、漁撈の3者より成り立っている。従来は狩猟、漁撈を主体とする生活であったと考えられていたけれども、縄文遺跡の調査研究の進展とともに当時にあってはむしろ植物採集を主とする生活であったことが推定されるようになってきたのである。しかし、こうした生産活動の3つのパターンがみな等しい割合で営まれていたわけがないことも明らかである。周辺の地形や自然環境とも密接に関係して、時には3つのパターンのいずれかが主となったり、従となっていたと思われる。こうした生産活動のパターンは各遺跡で検出された遺構や出土遺物の研究からある程度の復元は可能である。石ヶ坪遺跡は、河岸段丘上に立地し、縄文中期と後期の2時期の遺構と遺物が重複している。地表面より遺構面までの堆積土は浅く、しかも遺構検出面には夥しい量の河床礫が露出しているため遺構、遺物は層位的に分離することができなかったようであるが、遺物の出土状況をみると調査区の上流側から後期を中心とする遺物が出土しており、下流側から中期と後期の遺物がみつかっている。住居跡とみられる落ちこみや柱穴群は、調査区の全域から検出されており、住居跡は5~6軒は存在したとみられる。時期の特定は困難であるが、2~3軒を1単位とする小規模な集落が縄文中期前半には形成されていたと推定される。本遺跡からの出土遺物は、縄文中期から後期の土器、打製、磨製の石斧、石錐、磨石、石皿、石礫、台形石器、スクレーパーなどがある。中期の上器は、胎土に滑石を混入した九州系の並木式、阿高式土器と呼ばれているものである。大小の破片あわせて500点以上の数にのぼる。

ている。これに対して瀬戸内系の船元式土器や里木式土器、また、山陰の波子式土器などはみられない。後期の土器は初頭の中津式土器を主体とする。出土数は上器全体のおよそ5分の1を占めるといわれている。本遺跡の盛行期が後期初頭にあったことを示している。後期の上器にはこのほか瀬戸内系の福田KⅢ式、彦崎KⅠ式、津雲上層式などや九州系の鐘崎式土器などがみられるが、福田KⅢ式や彦崎KⅠ式に比べて鐘崎式などの九州系土器の出土量が多いことは注目される。

石器の出土数もまた多い。時期の特定できるものは少ないが、打製、磨製の石斧や石錘、磨石、スクレーパーなどの出土が目立っている。石器石材は、石斧や磨石、石錘には安山岩や砂岩が使用されており、スクレーパーや石錘などには安山岩とともに黒曜石が使われている。安山岩は遺跡に近接する冠山から供給されたものが多いようであるが、黒曜石では乳白色をなす半透明の大分県姫島産と推定されるものが非常に多い。上器とともに石器石材についても九州地方との密接な関係があったことが窺える。

さて、石ヶ坪遺跡での人々の生活であるが、石錘の存在は紙祖川周辺における網漁を、打製石斧、石皿、磨石などは匹見盆地一帯での植物質食料の採集、加工作業を示している。また、出土量は多くないが石鏃、スクレーパーなどは弓矢による狩猟と解体作業の存在が推定される。なかでも石斧や石錘、磨石などの多くの出土は、植物質食料の採集と網漁を基盤とする生活を中心としていたことを想定させる。そして住居跡に付随するように木の実殻の貯蔵穴⁽³⁾が検出されていることは、植物質食料の採集といつても単に採集するだけの段階ではなく、貯蔵穴に保存貯蔵し、水さらしなどによってアケを抜くことを知っていた段階——採集段階としては最も進んだ段階——であったと考えることができる。こうした生活も縄文中期上器と後期土器の出土量や石器の形態、組成などからみて縄文後期になってから形成されたと推定されるので、縄文中期にあっては中国山地の他の遺跡にみられるように、多くても2~3軒を1単位とする集団が狩猟と植物採集主体の生活を営んでいたと思われる。そしてまた、本遺跡の中前期土器に瀬戸内系や山陰系のものがみられないことは、中期の生活がきわめて九州的なものであったことを窺わせる。あえていえば滑石混入土器を携えた人々がこの地に移動してきたとさえ考えられるのである。

こうした縄文中期における生活も、後期になると九州系の土器や石器石材に加えて瀬戸内系の磨消縄文系の中津式土器などの伝播や打製石斧、石錘、磨石、石皿の出土数の増加など文化複合の生活が始まってくる。先述したように紙祖川周辺における網漁、匹見盆地一帯での植物採集や狩猟といった生活であり、採集生活としては最も進んだ段階であったと推定される。それは、この地が川と川の合流点付近に位置し、匹見盆地の出入口にあたることから動物を追って狩りをする場として適しているばかりでなく、川と川が合流する場は、魚類のよく集まる場であり漁をする場としても最適であること、さらには植物質食料としてのドングリ類や根茎類などにも恵まれていたからであろう。

4. 縄文時代の祭りの場——水田ノ上遺跡

水田ノ上遺跡は、石ヶ坪遺跡の下流の河岸段丘に位置する。昭和58年（1983）に遺跡の一部の調査が行われ土坑4基や石製勾玉、打製石斧、土版、精製・粗製の縄文晚期土器が出土している。¹⁴⁾今回の中では、多数の集石遺構や土坑とともに土版、土偶、打製石器、石錘や硬玉製管玉、碧玉製小玉、滑石製小玉、土器などがあつた。集石（配石）遺構は、径1m前後の掘りこみの中に河床礫を詰めたものや掘りこみの壁にそって河床礫を廻らすもの（ストーンサークル状）などがみられた。遺構の詳細については別項にゆずるが、こうした集石遺構は、遺構検出面である黄灰色土に掘りこまれたもののか、黄灰色土面に弧をなして溝状に走る黒褐色土の中にも存在した。黒褐色土の繋がりの確認と土層の断り割りが行われたかどうか確かめてないので断言はできないが、溝状に走る黒褐色土は、大きな環を描くように認められるものであった。東日本に分布する環状列石状の遺構とも考えられるものであり、西日本では類例はみられない。

出土遺物の中で注目されるものは、石製勾玉や硬玉製管玉、碧玉製・滑石製小玉などの装身具類と土偶、土版などの呪術品および打製石器類である。玉類や土偶、土版類は、東日本にくらべて西日本の縄文遺跡から出土することはきわめて少なく、特異な性格をもつものであるが、後期以降になると出土例がみられるようになる。玉類は、島根県崎ヶ鼻洞窟遺跡や山口県岩田遺跡などに例があり、土偶、土版類は岡山県中津貝塚、広江・浜遺跡、広島県下迫貝塚、芦冠遺跡、山口県岩田遺跡、島根県郡山遺跡などで出土している。祈りや祭り、さらには護符などとして用いられたものであり、縄文人の精神生活の支えとなっていたのであろう。こうした装身具、呪術品は、打製石器類などとともに縄文後期になって新しく加わってきた要素であり、それは縄文後期の生活が複合化してきたことを示している。さらには装身具や呪術品の出現は、集団内での社会的なとりきめがじだいに強まってきたことを間接的に表しているともいえるのである。

さて、水田ノ上遺跡の性格についてみると検出の集石（配石）遺構や装身具、呪術品類の出土からみて縄文人の墓地と祭りの場であったことを窺わせる。多量の土器や打製石器類の出土からみて、近くに住居群が存在することは間違いないことと思われるが、今回調査された遺構群は、そうした集落に伴う墓地、祭りの場と考えられそうだ。水田ノ上遺跡における縄文後、晩期人の生活の基盤は、先述したように植物採集と漁撈それに狩猟から成立っていたと推定されるけれども、前代にはみられなかった新しい文化要素（墓制、装身具、呪術品など）がいくつか加わってくる。採集生活としては最も進んだ段階の中にあって、生活は複合化し、集団内での社会的規制が強化されはじめたことを示しているといえる。

5. 歴史時代の農村——長グロ遺跡

長グロ遺跡は、木田ノ上遺跡の上流側約200mのところに位置する。平成元年（1989）に行われた試掘調査によって確認された遺跡である。1990年の本調査によって地表下約40cmの面から方形の竪穴式住居や土坑、須恵器、土師器、土錘などが検出されている。出土土器からみて奈良時代から平安時代の集落跡と推定される。竪穴式住居は、10軒以上が重複してみつかっている。各住居の規模は、 $4 \times 5\text{ m}$ 、 $3 \times 4\text{ m}$ 前後の方形の平面をなし、深さは20~30cm前後である。側壁の一辺にはカマドを付設している。カマドは大きめの河床礫を使用しており、内側はよく焼けて赤化している。住居内および周囲から土師器、須恵器、土錘などが出土している。

土師器は壺形土器が主体である。口縁部はくの字状に外反し、頸部内外面はハケ目調整、また、胴部外面はハケ目、内面は斜めもしくは横方向のヘラ削り調整である。須恵器は、蓋、环身が多く出土している。蓋は頂部から縁部にかけてロクロで半らに削り、その中央に輪状のつまみをもつて特色としている。口縁端部が屈曲して高さの高いものと端部が屈曲して外面に平坦部をもつ扁平なものなどがある。また、环身では、底部の外縁や内側に直立する低い高台がついており、体部が直線的に外傾するものが中心である。底部の切りはなしは、ヘラによるものと回転糸切りによるものの両者が存在するようである。

石見地方の歴史時代須恵器の総的位置づけについては、資料的制約もあっていまなお明らかではないが、出雲地方の出雲国府跡や高広遺跡群、石見地方の白坏遺跡（大田市）⁽⁵⁾や石見国分寺跡（浜田市）⁽⁶⁾、久永古窯跡群（瑞穂町）などから出土した土器との比較から8~9世紀ごろに製作されたものと推定される。

長グロ遺跡の性格についても、今後の類例の増加をまって検討されなければならないが、竪穴式住居を生活の基盤とし、土器、土錘などを日常生活用具としていることなどから農村集落と推定することができそうである。

鳥取県においても、当該時期の遺跡は、墳墓や窯跡群のほかは、国府跡とか国府跡、寺跡さらには白坏遺跡といった官衙や寺院に関わるもののが知られているにすぎない。建物も礎石建物や掘立柱建物が中心であり、竪穴式住居の発見された例はみられない。この意味で長グロ遺跡検出の住居群は、歴史時代の農村集落の研究にとってきわめて貴重な資料を提供するものであるといえる。

6. 原始、古代の文化交易路

以上、冗長すぎたが、匹見町の石ヶ坪遺跡、木田ノト遺跡、長グロ遺跡の調査の意義について思いつくままに述べてきた。繰返しになるが、これらの遺跡の内容は従来ほとんど知られていないかった西中国山地における縄文時代および歴史時代の研究にとって、今後不可欠の資料となることは間違いないといってよかろう。

石ヶ坪遺跡でみられた九州系の縄文中期土器や九州産出の石器石材の在り方、また、水田ノ上遺跡で発見された環状列石状の集石（配石）遺構や装身具、呪術品類、さらには長グロ遺跡における農村の集落といった新しい発見は、各時代各時代の生産活動や文化の流通、交易などの問題を考える上で大きな手懸りとなるものとなろう。

以前に私は、中国地方において縄文中期に遺跡・遺物が減少する現象は、人々が周囲の環境や食料資源とも関係して狩猟・植物採集を主とする山地型生活から漁撈・植物採集と狩猟による海浜型生活に生活様式を変えていったことが大きな要因であると論じたことがある。⁽⁷⁾ いまでもこの考えは変わらないが、石ヶ坪遺跡での多くの石鉢の出土にみられるように、中国山地にあっても河川による漁を盛んに行うようになった地域にあっては、小規模ながらもその場で山地型生活を営み続けたといえるのかもしれない。また、石ヶ坪遺跡での九州系の中前期土器が出土する背景は、まだわからぬ。中国地方に広く分布する船元式や單木Ⅱ式土器などは出土していない。さらには、中国地方における並木式、阿高式土器などの出土例は、本州西端の山口県や中国山地の一部の遺跡に限られており、日本海沿岸や瀬戸内沿岸ではいまのところみられない。こうした土器が石ヶ坪へ搬入された経路は、日本海や瀬戸内沿岸のルートからではなきようである。

ところで、中国地方の旧石器時代の交通路について稻田孝司氏は、遺跡の分布や石器類の分析から瀬戸内ルート、日本海ルートのはかり中国山脈尾根筋ルートを提唱している。⁽⁸⁾ 今後の資料の増加をまってあらためて検討すべきだとされているが、稻田氏の指摘される中国山脈尾根筋ルートは、実は縄文時代以降についてもかなり有力なルートと考えられるのである。後氷期以降の温暖化に伴う瀬戸内海の形成とともに中国地方と九州地方あるいは中部、近畿地方との交易が盛んになってくるが、縄文早期の押型文土器や織維混入土器の中部、近畿からの瀬戸内、日本海沿岸沿いの伝播と九州系の円形搔器やトロトロ石器の中国山地沿いの流れ、また、前期の九州の巣糞土器についてもクネガソネ、後谷、竹ノ花、西川津遺跡など日本海沿岸沿いの流れと同防衛北岸の遺跡から広島県大田貝塚などの瀬戸内沿いの流れ、これに加えて、山口県小高野Ⅱ、大谷浴遺跡や広島県冠遺跡、帝釈峠遺跡群などにみられるように中国山地沿いの伝播も考えられるのである。

さらには、弥生時代においても四隅突出形埴輪の中国山地沿いの伝播や広島県西北部での遠賀川式土器の数多い出土例、また、広島県西北部、東北部での前期古墳の発見なども從来の瀬戸内、日本海沿岸沿いの経路からだけでは考えられないような様相を示している。⁽⁹⁾ 稲田氏も指摘されたように、中国山脈の尾根筋交通路が古くから存在し、しかも瀬戸内や日本海沿岸ルートに匹敵するような太い経路であったと考えられるのである。⁽¹⁰⁾

現在この中国山地沿いには中国縦貫自動車道が貫通しており、南北に横断する自動車道も工事中である。手段こそ違え、こうした中国山地を縦貫する東西ルートと横断する南北ルートによって文

化が伝播し、物資が流通したと思われるのである。

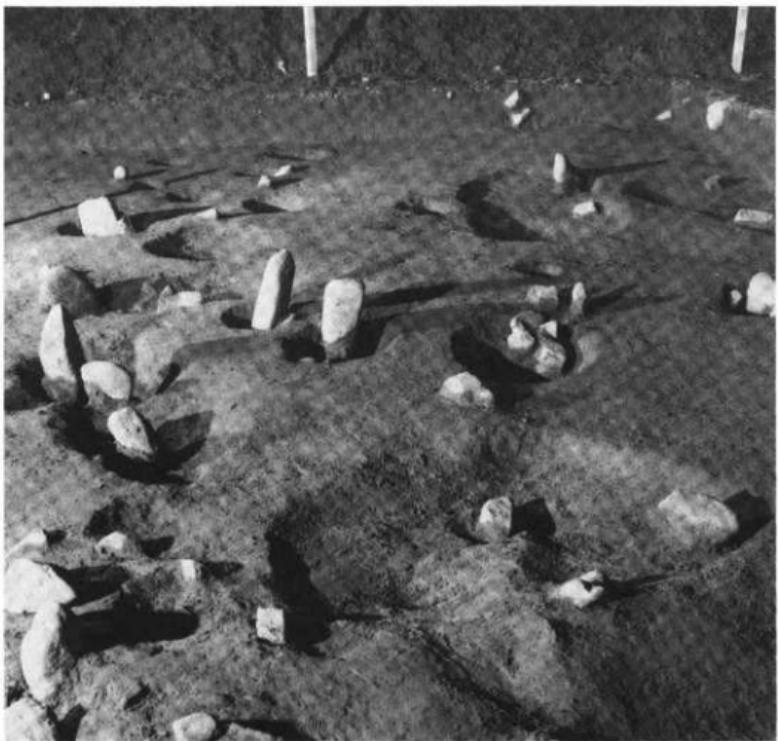
石ヶ坪、水田ノ上遺跡などでの九州系繩文中期土器や九州産石器石材（大分県船島産黒曜石）の出土や集石（配石）遺構や装身具、呪術品の出土は、匹見町域がこうした中国縦貫ルート⁽¹⁾や横断ルートといった主要交通路に面していたからにちがいないからであろう。

（河瀬 正利）

註

- (1) 現地調査にあたっては、田中義昭氏から数多くのご教示を得た。
- (2) 町域の遺跡については、渡辺友千代氏のご教示を得た。
- (3) 内からも周囲からも木の実類は検出されていないが、繩文遺跡の立地条件からみて今後、木の実類の発見される可能性が高い。
- (4) 松本岩雄氏のご教示による。
- (5) 大国晴雄・遠藤浩己編『白环遺跡発掘報告』島根県大田市教育委員会、1989年。
- (6) ト部青博「石見国分寺跡免振調査概報」『季刊文化財』第58号、1987年。
- (7) 河瀬正利「中国地方の繩文中期文化をめぐって」『古文化論叢』1990年。
- (8) 稲田孝司「日本海南西沿岸地域の旧石器文化」『第四紀研究』第29巻第3号、1990年。
- (9) 多くの遺跡は中国縦貫道予定地および横断道予定地に関わる調査で明らかにされている。
- (10) 瀬戸内と日本海を結ぶ河川沿いの南北の経路が存在したことはむろんのことである。
- (11) 1989年の匹見町の遺跡の現地調査時の話の中で「中国縦貫ルート」を提唱したことがある。現在の高速道のインターチェンジが位置する付近に多くの遺跡が存在する傾向がみられる。こうした場が古い時代から現代にいたるまで交通の要衝を占めていたことを示すのであろうか。ただこのような地域が集中的に免振調査されているからでもある。今後の調査研究の進展をまって改めて検討してみたいと考えている。

第3章 水田ノ上 A 遺跡



夕映えの水田ノ上遺跡
(58年調査)



挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図(1)	13
第2図 遺跡位置図(2)	14
第3図 遺跡配置図	15～16
第4図 遺跡周辺の断面図	17
第5図 土層断面図	18
第6図 配石遺構図(1)	21～22
第6図 配石遺構図(2)	23～24
第7図 配石立体図	25
第8図 SX12, SX21と遺物出土状況図	26
第9図 SX34と遺物出土状況図	27
第10図 方形土坑と遺物出土状況図	28
第11図 SX04, SX05+坑図	29
第12図 拾叢区遺構図	30
第13図 胸磁器実測図	30
第14図 土器実測図(1)	31
第15図 土器実測図(2)	32
第16図 土器実測図(3)	34
第17図 土器実測図(4)	35
第18図 土器実測図(5)	37
第19図 土器実測図(6)	38
第20図 土器実測図(7)	39
第21図 その他の遺物実測図	41
第22図 石器実測図(1)	42
第23図 石器実測図(2)	43
第24図 石器実測図(3)	44
第25図 石器実測図(4)	45
第26図 玉類実測図	46

図 版 目 次

- 図版1 1. 水田ノ上遺跡遠望（南東から）
2. 発掘状況
- 図版2 1. 粟玉の出土状況（C区）
2. 円盤形土製品の出土状況
- 図版3 1. 集石内に出土した局部磨製の石斧
2. 集石内に出土した骨片
- 図版4 1. ABトレンチ（南西から）
2. Cトレンチ層序状況（南西から）
- 図版5 1. B区配石状況（北東から）
2. C区配石状況（北東から）
- 図版6 1. C区配石に見られる立石（北東から）
2. 気球から西方向に見た配石状況
(右下に円形状のサークルが見える)
- 図版7 1. SX06（北西から）
2. SX08（東から）
3. SX09（東から）
4. SX12（東から）
5. SX21（東から）
6. SX39・SX40（北から）
7. SX27（東から）
8. SX28（東から）
- 図版8 1. 方形土坑内の配石出土状況（北西から）
2. 土坑内に出土する石塊状況（方形土坑）
- 図版9 1. Cトレンチ壁に表出した集石土坑（SX05）
2. 土坑SX04・SX05の発掘状況
- 図版10 1. 拾張区完掘状況（北から）
2. 拾張区に検出された各遺構（南東隅）
- 図版11 1. 陶磁器類
2. 土器(1)
- 図版12 1. 上器(2)
2. 土器(3)
- 図版13 1. 土器(4)
2. 上器(5)
- 図版14 1. 上器(6)
2. 土器(7)
- 図版15 1. その他の遺物
2. B地点で採取した深鉢土器と浅鉢上器
- 図版16 1. 石器(1)
2. 石器(2)
- 図版17 1. 石器(3)
2. 石器(4)
- 図版18 1. 石器(5)
2. 石器(6)

第1節 位置・立地・歴史的環境

1. 位 置

水田ノ上A遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖字荒木（イ226・227番地ほか）に所在する弥生時代～縄文時代の遺跡である。隣接には「水田ノ上遺跡」「榆田遺跡」などの遺跡があり、本遺跡はその地区名であって、総称は「水田ノ上遺跡」として包含呼称されている一区画を今回発掘したものである（第2図・第3図）。

2. 立 地

本遺跡は、標高約269.4mを測る河岸段丘上に存在する。その段丘は比高差約5mを測って北東流する紙祖川が形成したもので、山裾までの幅約200mを測る河谷沖積地である。遺跡は、その南東岸面の水田地として利用されている流域に沿った狭長な平地に立地する（第2図・第3図・第4図）。

3. 歴史的環境

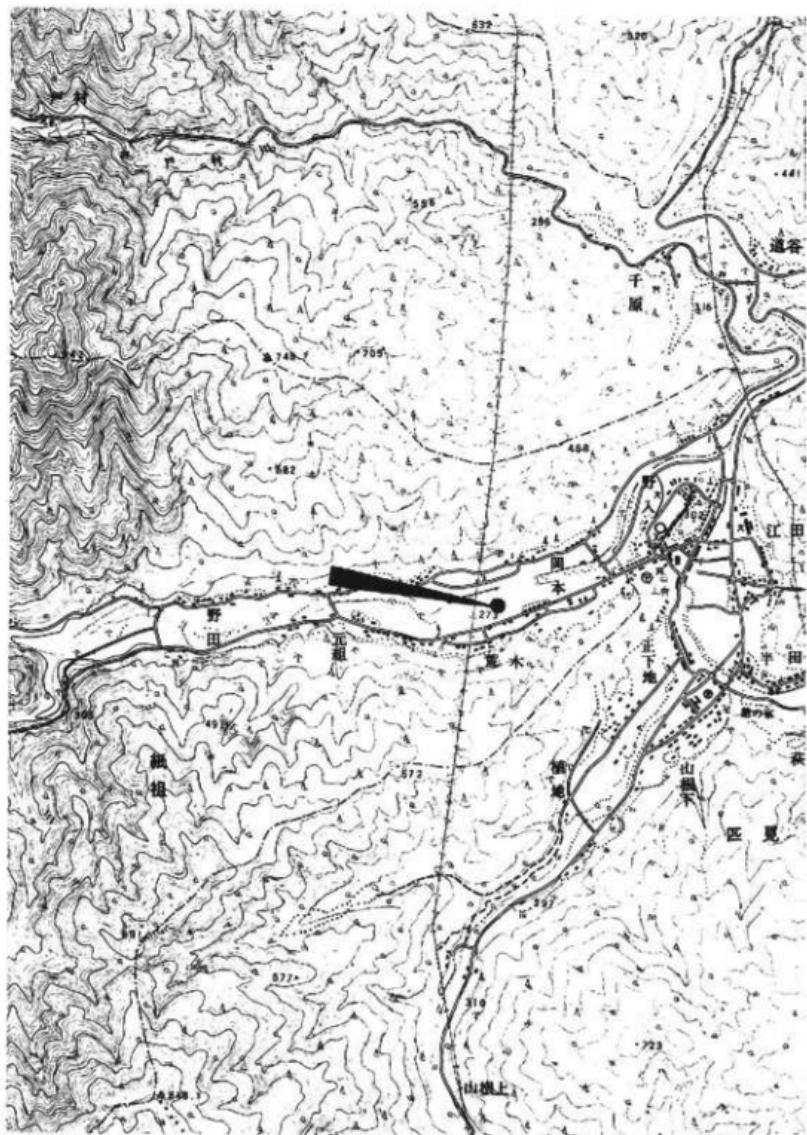
本町にはナイフ型石器が出土した先土器時代の新横原遺跡（県指定）をはじめとして、縄文遺跡18箇所、弥生・古墳時代の遺跡は20箇所を数え、それらは本遺跡と同様、河流が形成した河岸段丘にその集中が見られる。したがって本遺跡周辺も原始古代人にとって見逃されるものではなく、上流域には家廻り遺跡（縄文）、石ヶ坪遺跡（縄文）、前田遺跡（縄文）、などが点在し、また下流域には福田ノ上遺跡（弥生）、神田遺跡（縄文）などが狭長な流域に連なって分布している。

狭長とはいえた本町では最も拓けた当地区では、原始遺跡にとどまらず、本書で報告する「長グロ遺跡」「下正ノ田遺跡」があり、その他、善正町遺跡などの古代遺跡も存在している。こうした沖積地の段丘面の好適な立地性は、歴史時代に生活域として引き継がれたらしく、殊に隣接する字名にはその遺跡の痕跡を遺しているものもあり注意されよう。これらの地名はおそらく平安末期・鎌倉期に成立したといわれる別府に関連したものと想定され、クモンキョウ・炭焼免などはその莊官の給田であったものであろう。これと同時期と想定される磁器なども、本遺跡で出土している（第13図・図版10）。

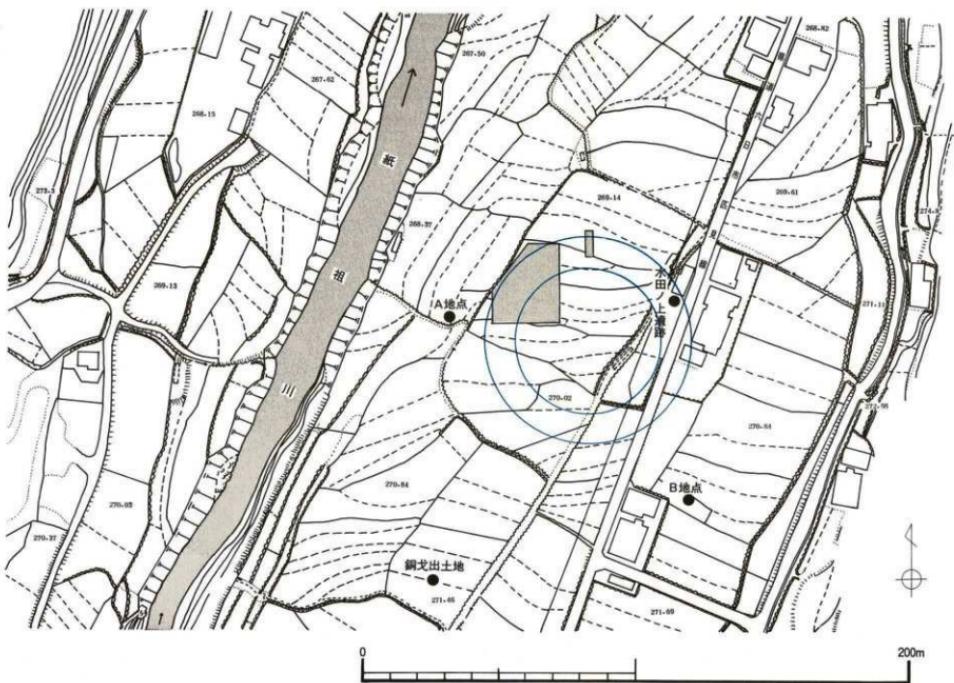
このように本遺跡周辺に高い密度で遺跡が集中する背景には、紙祖川が形成した可耕地がひろがっ



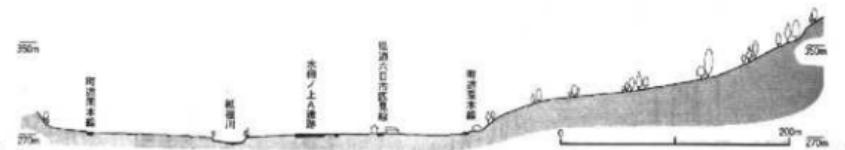
第1図 遺跡位置図(1)



第2図 遺跡位置図(2)



第3図 遺跡配置図



第4図 遺跡周辺の断面図

ていること、また、その流路が文化的通路の役目を果たしたものと捉えることができるであろう。

第2節 調査の概要

1.はじめに

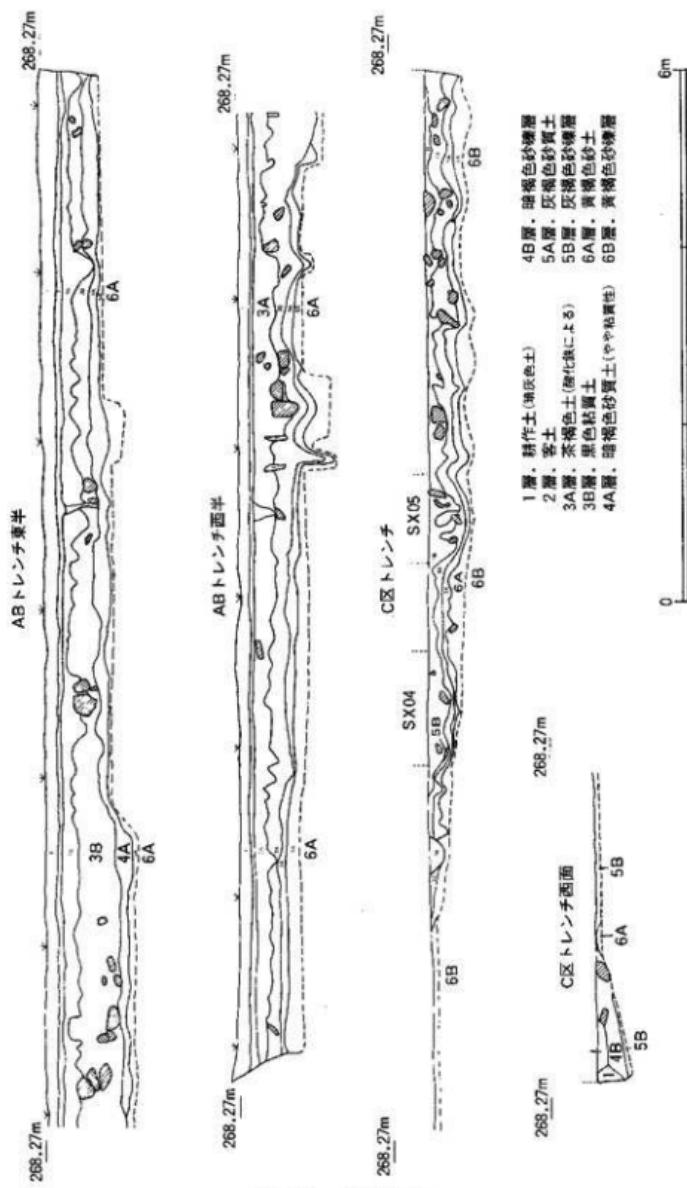
経緯 本遺跡の存在が明らかになったのは、昭和58年(1983年)本地点の100m南東(県道六日市西見線沿)側で長谷川努氏が倉庫兼用の住宅を建設するため整地したところ、縄文晩期を中心とした遺物が発見されたことによる。同年11月には約100m²の敷地内で鳥根県教育委員会文化課の協力によって調査が行われ縄文晩期に比定される遺物とともに勾玉・円盤型土製品などの遺物、あるいは土坑・柱穴とともに集石・立石などの遺構が検出された(第3章 口絵参照)。これにより、祭祀的色彩の濃い遺跡であることがわかった。その後、県営圃場整備事業に伴って、平成元年(1989年)11月に本遺跡周辺に試掘坑を設定して調査し、その遺跡範囲が明確化したものである。

調査の経過 現地調査は平成2年4月10日から同年8月25日までのうち79日間、687人役を費やして行った。5月中旬には、縄文晩期初めの配石を伴う遺跡として高く評価されたことから町教育委員会は保存を決定した。殊に配石遺構の調査は、調査方法が確立していない現状では難しく、一応、平面的全体像が把握しきれる程度とし、盛土工法で遺すこととしたのである。したがって、今回の調査では一部を除いて3層上面までとし、以下は調査していない。

2.調査区の設定

調査区は、平成2年度の分布調査で確認された地点を対称に設定することにした。つまり紙祖川から東へ約50m行った。2段目の段丘端(第3図)にある。

まず、基準点杭を、前年の調査で分布状況が把握された範囲の南東端に任意に設定した。その地点から磁北へ30m延ばし、これを基準線とした。そして西面側へ直角に至った段丘端までを、その調査範囲とみたからである。つまり南面は基準点から西へ25mを測った地点、北面は西へ10m測った範囲であった。したがって西面側は、段丘面に沿う造り方であったため不規則な調査区を呈して



第5図 土層断面図

いる（第3図・第6図）。

セクションベルトは、30mを測る基準線の中央から幅50cmのものを直角に西側に延ばした中央ベルトと称するものと、その中央ベルトの中央から、さらに幅50cmのものを直角に南側に振ったABベルトと称するものを設けた（第6図）。また地区グリット名については、これらのベルトで区画された範囲をもって称することにした。即ちA区は、中央ベルトとABベルトが直交して区画する基準線に面した南東面のものを、B区は、A区に對面する南西側の区画を呼称することにした。さらにC区は、中央ベルトから北面側に位置する区画を区分とする大区画にした。

なお、層序については平成2年度の調査で確認されているものの、本年度との関連性が把握されていなかったので、先行して中央ベルトの南面に幅60cmABレンチと称するトレンチを設けた。またC区については後述するが、掘削中途で設定した幅1mのトレンチを設け（第5図・第6図）るとともに、終盤時には集石帯の延長方向に3m×10mの拡張区を設け、集石遺構の形態の把握に努めた（第12図）。

3. 層序と遺構

基本土層 本遺跡の基本的な土層は、上から暗褐色を呈する水田耕作土の1層。0.5～1cm大的石粒を含む灰褐色土の客土（2層）。3層は上位面に酸化鉄が沈着しているものの、実質的には黒色粘質土。4層はやや粘質性の暗褐色砂質土。5層は砂質性の灰褐色土。6層は黄褐色砂土あるいは円礫を含んだ砂礫層（第5図）である。

調査地内の北西（下流方向）面と南東（上流方向）面の間には10～20cmの標高差があって、紙祖川下流方向に傾斜している。3層の黒色土は、配石等を検出した縄文後期末～晩期の包含層で、その上面（あるいは客土）には弥生以降の遺物が若干出土し、層厚は25～70cmを測り、東ないし南東（山裾側）に傾斜する。4層の暗褐色土は、層厚10～50cmを測る層でABトレントのセクションには下面の5層との層界に柱穴・上坑が確認される。“陥込み”等が認められることから、遺構の存在性が強いと思われる（第5図・図版4-1）。

それらの遺構は共伴遺物からみて縄文後期前半から中葉にかかる縁帶文系を主とする時期のものと考えられる（第18図58～63）。5層は地山と想定されるもので、層厚は3～15cmで薄く6層との層界は不明確であるが、やや粘質性があり締まっている。6層は基本的には黄褐色砂土であるが、北西面（紙祖川寄り）が上昇しており、特に北西（紙祖川下流側）面は顕著で（第5図のCトレント）、その基盤層にしたがって上層の各層位とも狭まっている。この高まりはおそらく紙祖川が形成した流石堤であろうと考えられるが、しかしその上面は流路・若しくは遺構等の削平によるとも考えられる擾乱的層序を呈している（第5図-2）。

第3節 遺構

1. 配石の概要

はじめに 前述したように面的な発掘は3層上半までとしたため、一部を除き配石等の深層状況、及び土坑の有無については把握していない。また配石に使用されている石材は、河から持ち込まれたと思われる円礫が大部分で10~80cmのものが用いられ、若干、角礫あるいは焼石も混じる。その他に磨石等(第12図-SX02等)の生活品を使っているものもある。

形状分類 配石遺構を「縄文時代の人間が墓地、あるいは祭祀的な意味をもって構築した城に残存する石群」と見、以下平面的な形状から5類に分類する。

1類(円形配石遺構)…0.7~1.5m程度の円形・椭円形・半円形に配置したもの。

2類(方形・直列状配石遺構)…方形状・L字状・直列状に配置したもの。

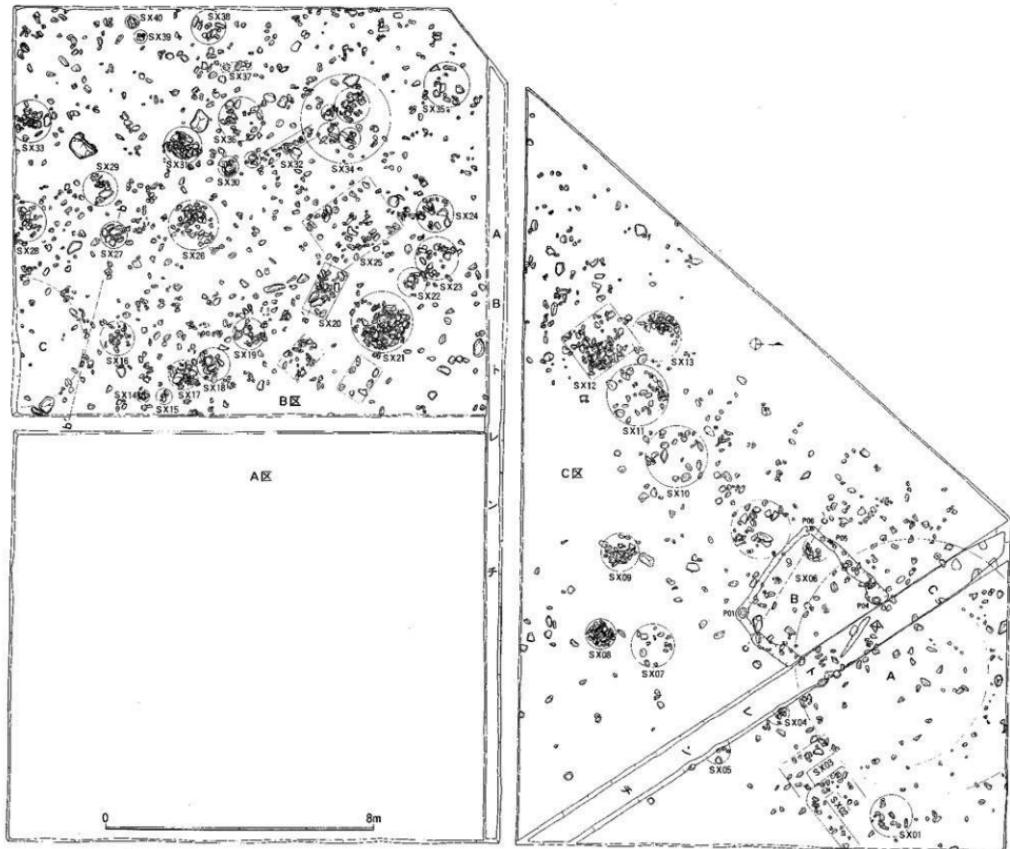
3類(組石配石遺構)…小規模(径0.4m以下)で組石状に配置したもの。

4類(立石配石遺構)…石を立てたもの。

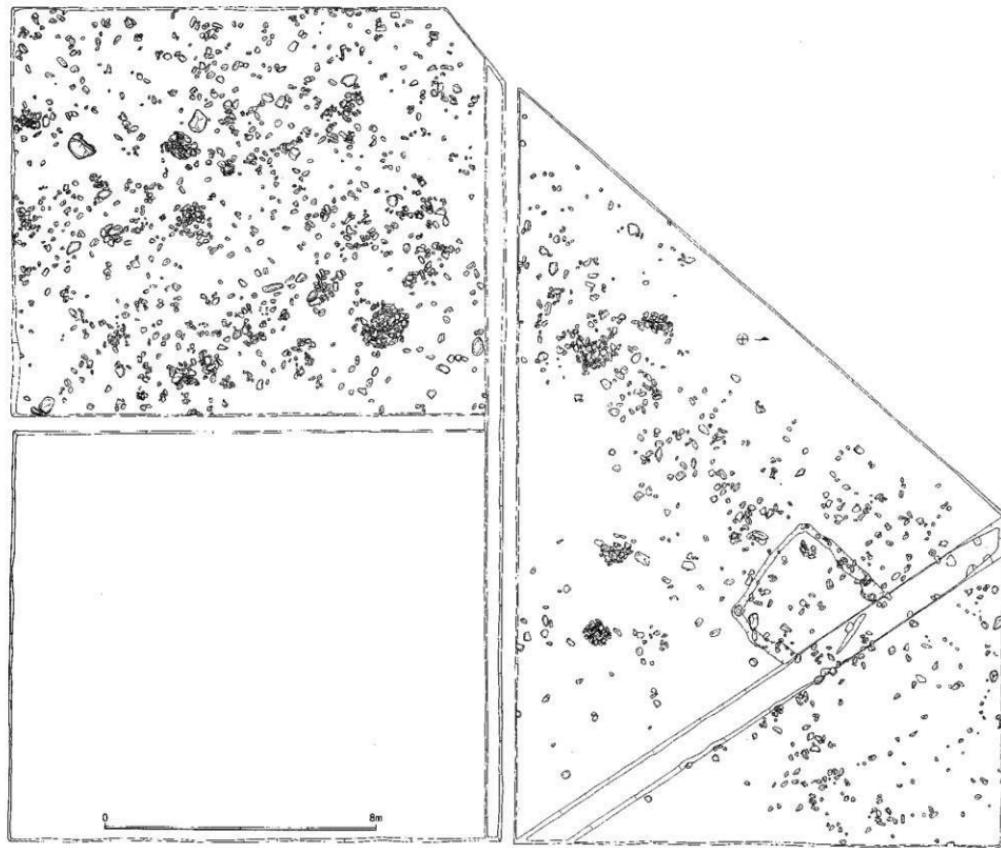
5類(大型円形・方形配石遺構)…直径3m以上の円形・方形状に配石したもの。

これらの分類は、掘削深層度によるものと思われるが、現時点できさらに細分し、以下のタイプに仕分けできる。

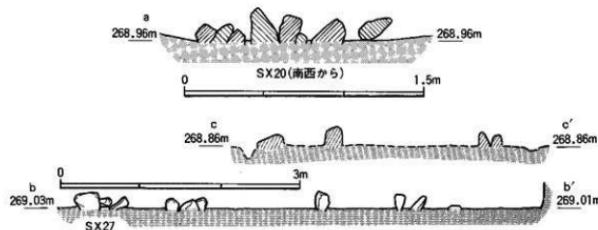
- 1類
 - ① 集石的なもの(第6図-SX08・SX09・SX13・SX17・SX18・SX21・SX26・SX30・SX31など)
 - ② 疎間的なもの(第6図-SX01・SX05・SX07・SX10・SX11・SX16・SX23・SX35・SX36など)
 - ③ 群集的なもの(第6図-SX34など)
- 2類
 - ① 方形的なもの(第6図-SX20・SX25など)
 - ② L字・直列的なもの(第6図-SX02・SX03・SX32など)
- 3類
 - ① 積石的なもの(第6図-SX14・SX15など)
 - ② 併立的なもの(第6図-SX39・SX40、第12図-SX02など)
- 4類
 - ① 配石内に立石するもの(第6図-SX01・SX02・SX03・SX06・SX17・SX19・SX20・SX21・SX32・SX34・SX38など)
 - ② 単独的に立石するもの(第6図・図版5-1など)
- 5類
 - ① 円形的なもの(第6図にA・Cと表示したもの)
 - ② 方形的なもの(第6図にBと表示したもの)



第6図 配石造構図(1)



第6図 配石造構図(2)



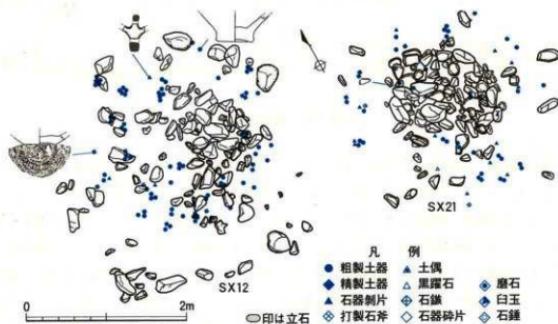
第7図 配石立体図

配石の状況 配石間に、SX01-SX02、SX11-SX12-SX13、SX17-SX18（第6図・図版6-2）などに近接あるいは重複するもの、または疏隔のものであって精齊さは見られないことから、ある程度の時期差があると想定される。また、これらの配石がどのような集合形態を示すかについては、調査範囲が狭くて明らかでないが、西～北西側にその集合体の外円部と想定できそうなものが確認される。これは拡張区（第12図・図版9-1・2）あるいは既発掘の水田ノ上遺跡でも同時代の遺物及び同型態の配石遺構が確認されていることからも判断でき（第3図）、その直径は70～80mにはなろうかと思われる。また、その集合帯の幅については、自然的地形（基盤層）の深浅の差異があって、平面的には捉らえることができない。つまり配石が形成されている西～北西の紙祖川面の基盤層が高く、円内部に向かって殊にC区では顕著に陥入している（第5図）ことから、その面の配石等は浮彫りできないからである（C区内での配石帯が狭長に捉えられているのはその為である）。しかしB区を見る限り、その集合帯の幅は12m以上はあるかと想像できそうである。

各配石の傾向を若干みていくと、1類-①のものには立石が無いか、あるいは疎開的であるなどの配石に比べて、きわめて少ないとすることがいえる。その傾向はSX08・SX21・SX27・SX31等の配石にみられるように、周縁石が整然としたものほど顕著である。またこれらの配石に土坑が伴うものかといった点については精査していないので明らかではないが、土層断面図（第5図）には配石に伴うと想定できる何箇所かの上坑が見受けられる。このうち1類-②と思われるSX04・SX05の北東半の残存部分（C区サブトレンチにかかる）を精査したので若干の傾向は掴めるであろう。（第11図・図版9-1・2）。

この2坑によると、まず配石下の黒色土の4層内に下位層と断定できる暗褐色土・黄灰色土のブ

ロックが点的にみられることから、掘削がされたことは確かである。その坑底までは、上面の配石面からSX04は約25cm、SX05は約40cmを測り、後者は深く、ほぼ円形を呈している。またSX04は、梢円形を呈するが、坑底部は不整形で配石が比較的密である。両者とも陥入したと思われる立石が中央部にあって、疎間であるものの底面及び土坑周縁部に円礫を中心とする石が囲繞する。



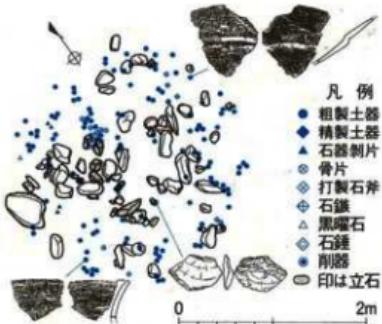
第8図 SX12・SX21と遺物出土状況図

5類と分類した大型円形・方形のものは、坑内に立石・集石等の配石を精査さなく、取り込むものも見られることから前述した他の配石と同様に、精査していないものの、相互間にある程度の時期差があるものと考えられる。このうち第6図にAと表示する大型円形配石は、直径約7mを測り、その内円に2重、あるいは3重とも見受けられる小石を中心とする配石が認められる。調査時には確認できなかったものの、図版6-2ではそのことが顯著で、また層序の色調差からも滑脱りになっている。したがって、同配石の基底面は、若干の段差を設け（5層上面）整えたものと考えるのが妥当であろう。

第6図にCと表示する円形配石は、北半のみ発掘したが、円形に廻ると見るならば、直径約4.5mを測る。また周縁する列石には立石が疎間に配されているが、内円には配石が僅少である。また、このような大型配石は図面のみでは浮かび上がってこないが、写真による鳥瞰では土層の色調

と相俟って、他にも捉ることができるものもある（図版6-2）。

C区に検出された方形土坑と呼称するものは、約3.4×3.8mを測り、ほぼ正方形に廻らされた溝状の陥ち込みのことである（第6図・図版8）。この方形に廻らされた周溝は、4層中位面の黒色土から5層の灰褐色土に掘り込まれたもので、最浅部で約4cm、最深部で約17cmを測り、墳丘状に高まりをもった外円部側（西-北西）が全体的に浅い。この「U」字形に掘り込んだ周溝内の下面には柱穴と考えられる径18~23cmのビットが5個検出されているとともに（第6図・第10図(2)、図版8-1），陥入する10~30cm大の石材の散在は注意される。また周溝以外は同レベルであって、周溝内等を掘り込んだものではない（第7図-2）。



第9図 SX34と遺物出土状況図

れるが、埋葬したものではなかろう。SX21（第8図・図版7-5）では、数点の石器剣片・土器片とともに、配石の隙間に欠損した臼玉が出土している（第8図）。また方形土坑と呼称するB地点及び周辺では（第6図・第10図）、多量の遺物が検出され、とくに北面での精製土器片の比重の高さは注意された。

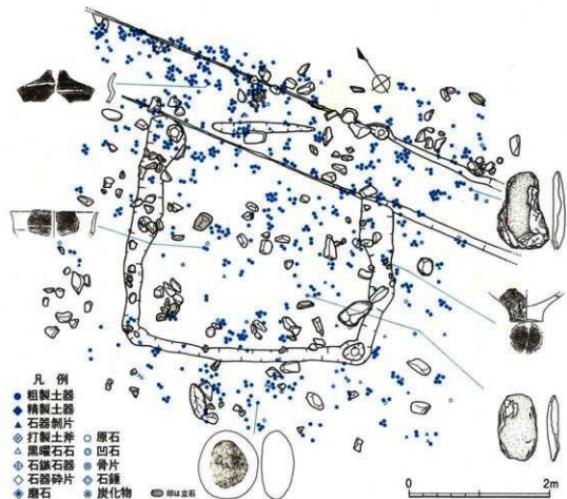
これらの数基の配石坑上及び周辺の出土状況から、配石の性格を抽出することはできないが、少なくともI類-②と分類したSX04・SX05等は土坑を伴うものといえる（第11図）。その当坑では坑上及び配石中位面に細片の土器、下位面に骨片が数点検出され、両坑とも明確に層序的出土状況が把握されている。その骨片については人骨あるいは獸骨かについて分析していないものの、配石形態及び層序的にみて、おそらく前者にあたると思われ、したがって、墓坑ということになろう。また出土遺物には、玉類・土偶・円盤型線刻土製品等の呪術具も伴っているが、前者の2坑からは検

配石と遺物・配石と遺物との相互的関係は、半載部分のみ調査したSX04・SX05を除いて調査していないので詳細については判らないが、しかし配石の坑上出土とはいえる、ある程度の傾向を掴むことができそうであるから、気付いた点について若干のコメントを述べておく。

まずSX12（第8図）では、3層下位（3B層）面から土偶の胸部が北側で検出されている（第8図・第21図・図版15-1）。他の部分は出土していないものの、周辺から粗製を中心とする細片とともに検出された。層位的にみて配石に伴うものと考えら

出されておらず、中途発掘の現時点では、これらの呪術具は埋葬品というより坑上の出土状況から供獻用と見た方がよいかかもしれない。勿論、埋葬あるいは供獻用に両面での可能性は遺されていると想定できるが、5類に分類した大型円形・方形配石遺構の形態にみられるように、墓ではない可能性のものもあり、祭場的機能の遺構も存在することから、これらの呪術具は坑上の祭祀に関する遺物ということになろう。

出土遺物を総体的に見ると、土器片約6,000点もの多數が出土しているものの、1個体の完形品にできるものではなく、調査区の周辺での採集品に比べて（第3図のA・B地点）きわめて細片である



第10図 方形土坑と遺物出土状況図

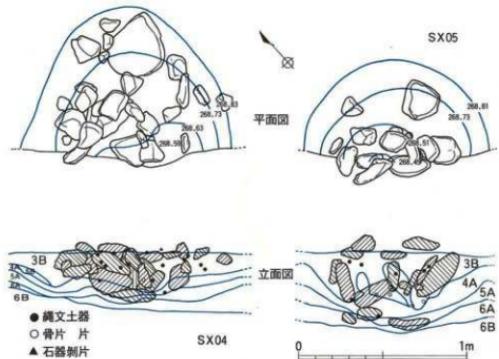
こと。また方形土坑上にみられるように、精製土器の出土比率が部分的に高い地点が見られるなど、こうした傾向は82点を数える骨片とも相俟って、その成因は祭場あるいは葬地等の祭祀の様相を呈しているといえそうである。

石器においては、石器剣片・石器碎片を含めて、1,300点出土しているものの、石斧・磨石・石鎌などの生活具はきわめて少数で、中には配石に使用されているものもあり、これらは非生活用具としての要素もみられる。

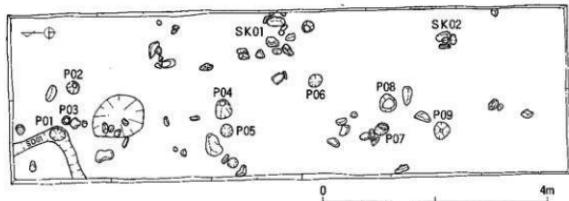
第4節 出土遺物

陶磁器（第13図・図版11-1） 1～5は、耕作土および2層の客土から出土した陶磁器類である。

1は、淡緑色の施釉が全面にされるが、口端部は淡茶色を呈し、また蓮弁文の露胎部分は釉が薄い。おそらく13世紀中ごろから後半ごろの中国製の龍泉窯系のものであろう。2も中国製の龍泉窯系の蓮弁文の青磁器で、緑灰色を呈する。『日本出土の貿易陶磁集皮』によるところのB-1類に分類されるものと思われる。3は、暗緑色を呈し、底部に向かってぶ厚い。内面に2本の平行曲線の割花文が描れ、器面には輪縁痕が見える。12世紀中ごろから13世紀初めの中国製龍泉窯系の碗である。4は、灰釉が施された美濃焼の小皿で、15～16世紀のもの。5は、翡翠釉が施された交趾製と思われる小皿で、16世紀ごろのものであろう。

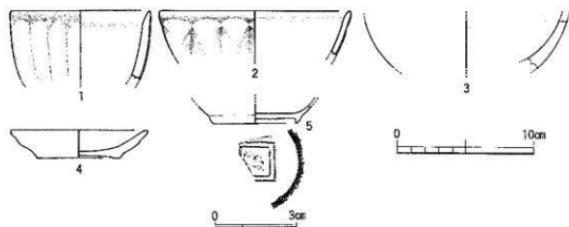


第11図 SX04・SX05土坑図



第12図 拡張区遺構図

弥生土器（第14図・図版11-2） 1～6は、3層上面から出土した弥生土器。そのうち1,2は「く」字状に短く外傾し、肩部は、あまり張らず、やや円みを帯びた型。外面頸部以下はハケ目調整とするが、頸部および口縁部はヨコナデ。内面は頸部下半以下をヘラ削りとし、口縁部はヨコナデ。外面の色調は、前者が茶褐色、後者は淡褐色を呈する。3は、頸部が強く外傾し口縁部が拡張する形である。外面は頸部下半を深いハケ目、口縁部をヨコナデ調整する。6は、口縁部がゆるく「く」字状に折れ、端部はやや下方が拡張し、ハケ目調整とする。頸部下半に斜行の巻貝による連續圧痕文がみられる。色調は内外面とも黄褐色を呈する。

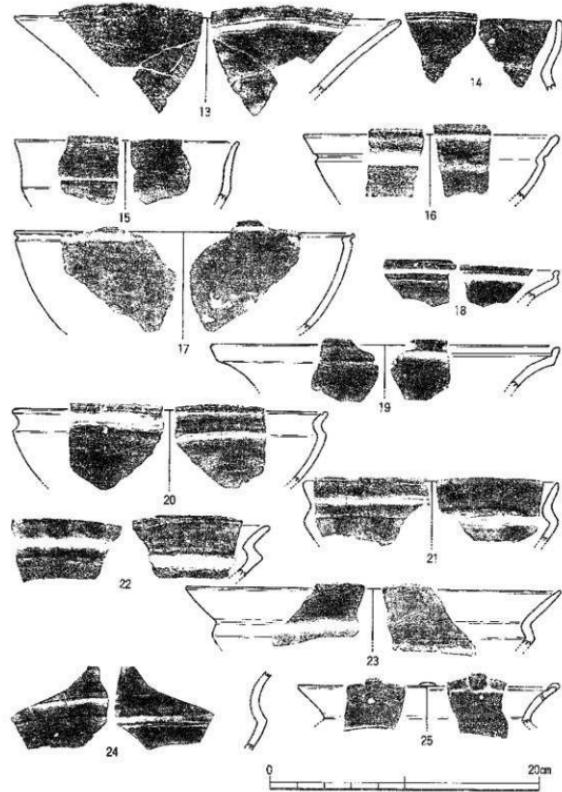


第13図 陶磁器実測図

縄文土器（第14図～第21図・図版11-2～図版14-2） 7は、C区3層に出土した突起帶土器の口縁部。内外面ともナデで精緻に調整する。突帯に刻みをもち、その上部に2本の平行沈線、下部に3本の平行沈線を弧状に施す。胎土に2mm以上の砂粒を含み、外面は茶褐色、内外は黄褐色を呈



第14図 土器実測図(1)



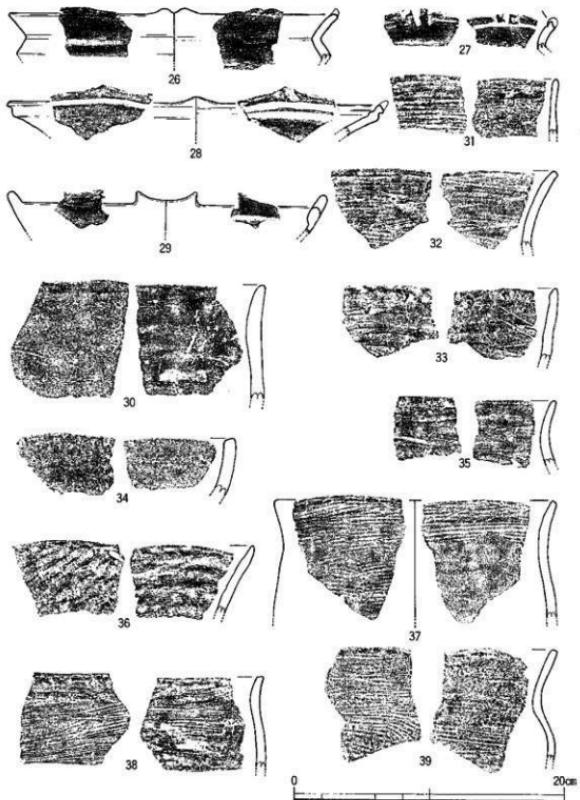
第15図 土器実測図(2)

する。おそらく晩期前葉のものであろう。

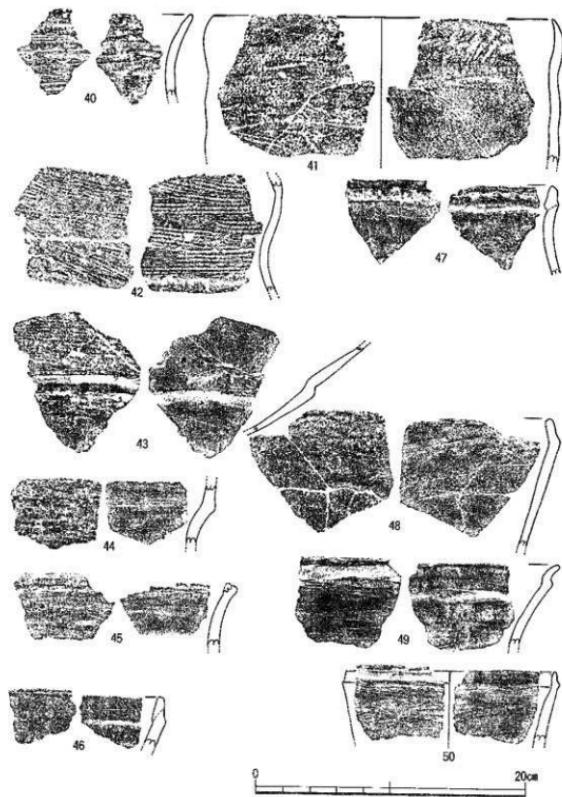
8・9・12・13・15～29は浅鉢系の上器片で、そのうち8・9は施文等が行れていない口縁部であるが、精緻に研磨が施されている。8は、内外面とも暗褐色で、胎土は赤褐色を呈し、堅緻である。9は、箇で精緻に研磨され、内外面とも茶褐色を呈する。10・11は、強く外反した粗製系の深鉢上器の口縁部。頸部外面に範状施文具による研磨跡が顯著。色調は前者が茶灰色、後者は黄褐色を呈する。12は、口縁端内面に沈線を施文する粗製土器で、茶褐色を呈する。13は、口縁部内面に段をもった精製土器で精緻に箇で研磨され、色調は暗褐色を呈する。突帯文出現直前のものであろう。14は、深鉢形土器。「く」字状に立ちあがり、口縁部は僅かに内湾し、その端部は内面側に向かって曲り込み段をついている。内外面とも箇で精緻に磨き、内面は黒褐色、外面は灰褐色を呈する。15は、肩部に段をもち、口縁部に向かって緩く外反する鉢形の半精製系の十器。胎土に蜜母を含み、外面は橙褐色、内面は茶褐色を呈する。後期の浅鉢形土器のように口縁が長くのびる。16～21は、口縁から頸部にかけて「S」字状に屈折するもので、そのうち17は端部を短くつまみ出す。また18・19は口縁上端が上方にくり上がり、20は沈線が施されている。いずれも精緻に研磨され、色調は黒褐色～暗褐色を呈すが、24は茶褐色である。25～29は口唇部の内側を中心に、小型山形突起あるいは鱗状突起を作り出し、粘土帯を貼付けたものである。28にはその下部に凹線や段がみられる。

30～42は、口縁部に特徴的な施文等が行われていない粗製の土器。そのうち30は、内外面とも条痕調整の後、ナデで、色調は内外面とも暗褐色を呈する。31は、直立気味に立ち上がった薄手の粗製十器の口縁部。内外面とも条痕調整とし、内面はナデ仕上げとする。32は、外反する粗製の口縁部。内外面とも条痕調整の後、色調は暗褐色を呈する。33は、外傾するやや厚めの粗製の口縁部で、内外面とも箇で調整する。34は、内外面ともナデ調整した粗製土器の口縁部。口縁は内湾し、色調は、内外面とも黄褐色を呈する。36は、強く外反した粗製の口縁部。外面に斜めにナデ、内面は横方向のナデを施し、焼成は良好で、灰褐色を呈する。37～40は、内外面とも条痕で調整した深鉢形の粗製土器。41は、口縁が尖り、内湾する。外面は風化が著しく、調整手法については判らないが、内面は範状施文具によるナデ。胎土に砂粒を多く含み、器面は粗い。42は、頸部がすぼまり、口縁部に向かって外反しながら、口端部は内湾するという深鉢形土器。内外とも、条痕調整で黄褐色を呈する。晩期前葉の器形のものであろう。43は、口縁部に向かって強く外傾し、肩部でクラシク状に折曲する粗製系の浅鉢。口頸部外面は板状施文具によるケメリで、折曲下部はナデ調整、内面は精緻にナデを施し、色調は灰黑色を呈する。45は、口縁部が外反した粗製土器で、口唇端は外傾し、両面につくり出されている。内外面とも板状施文具で調整され、内面は橙赤色を呈する。

46～48は、外傾して立ちあがり、口縁部で肥厚し内傾する粗製深鉢形の口縁部である。そのうち46は排上で採集されたもので、内外面ともナデ調整が施され、内面には口唇部接合痕が顯著である。



第16図 土器実測図(3)



第17図 土器実測図(4)

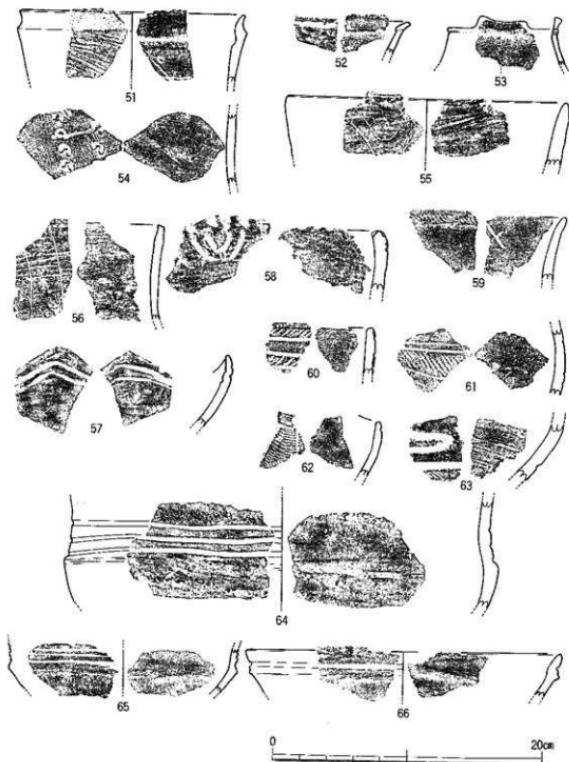
47は、2層客上から出土した口縁部で、端部は円みを帯び、内面の接合部が凹線状になる。内外面とも粗いナデで、外面は暗茶色、内面は黄褐色を呈する。48は、内外面とも平滑にナデ調整する。内面折曲部に笠状施文具による整形痕が顕著で、口縁端部には指頭による整形痕もみられる。繩文晚期前葉のものと思われる。

49～51は、頸部が短く「く」の字状に屈曲するもので、49は内外面とも板状施文具によるケズリを施し、茶褐色である。50は、やや外傾するものの、口唇部は直立する小型の鉢型土器で、色調は茶褐色を呈する。51は、外而頸部下半を条痕調整とし、その上部はナデ。頸部内面に抉り状の強いナデを施し、灰褐色を呈する。53は、縫状突起をもつ小型の浅鉢。器内は薄く、内面の調整は風化してわからないが、外面はナデ。色調は黄褐色を呈し、堅緻である。

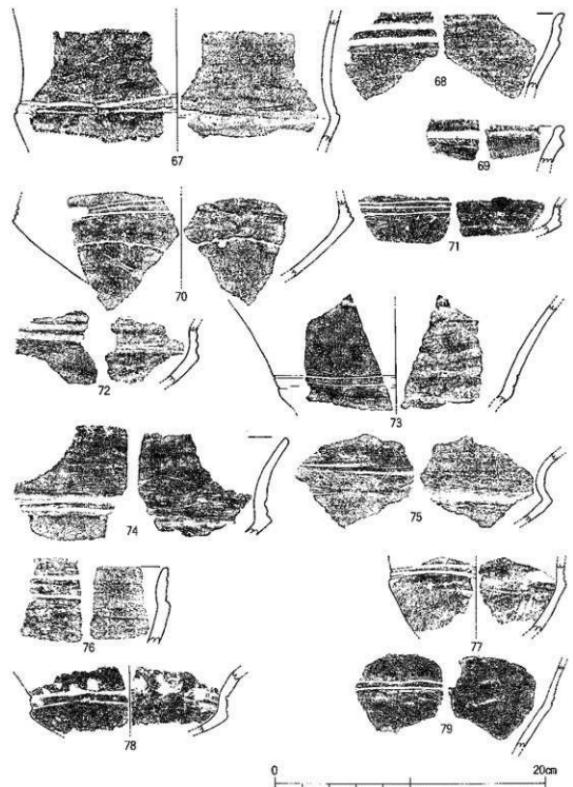
54～63は、器内に文様を有するもの。そのうち54は、内外面をナデ調整とし、外面に半截竹管文を配する原下層式に類似する土器。55は内外面とも条痕で調整し、外面に曲線の細沈線を施文した粗製深鉢上器の口縁部。56は、内外面とも巻貝による条痕の調整で、外面に縱方向の細沈線が施文されている。两者とも色調は茶褐色を呈する。57は、内外面とも笠状施文具で精緻に磨かれた浅鉢の波状口縁。口縁部に2本の巻貝による押圧沈線を施文する。おそらく晚期初頭に位置付けられる滋賀里I式併行であろう。58は、波状口縁をもつ粗製深鉢土器の口縁部。巻貝状の施文具で口唇部に刻目、若干肥厚した外面に弧状沈線を施す。59はサルガ鼻式あるいは彦崎KII式、北白川上層Ⅱ期に比定されている土器。内外面とも笠状具で精緻に磨かれ、外面口縁部端に繩文を有する。60は、外面口縁部に2本・対沈線を施し、その区画に斜行の刻みを配するもので後期後葉と思われる。62は、外面に2枚貝による腹縁部を連続施文したもので、ボール状の鉢形土器。

64～81は、口縁部・肩部に沈線および凹線を1～3本廻らしたもの。そのうち69・76は粗製、64・68・80は丁寧にナデを施した半精製といえるもので、残りは磨きを施した精製のものである。その多くは岩田3類であるが、66・69は岩山4類である。また74は、肩部からやや内傾し、口縁部に向って長めに開く形態のもので、これらは太郎追遺跡でもみられ、おそらく繩文後期末のものであろう。外面は条痕で調整し、磨きもみられるものの全体に粗い。しかし内面は幅の狭い笠状の施文具で精緻に磨く。

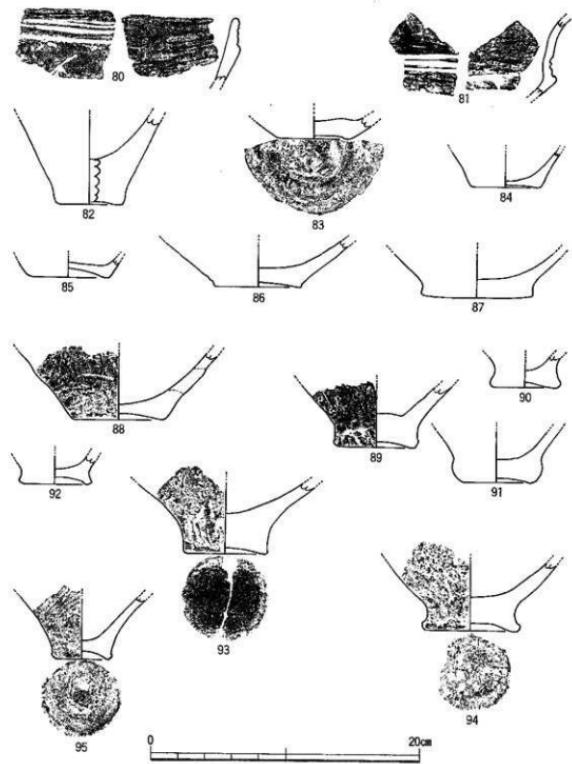
底部 82～95は底部。そのうち82は弥生土器、83～86は繩文土器の精製、87～95は粗製のもの。82は、底部外面を横ナデとするが、上面は縱方向の笠ナデで、底面は僅かに凹み、笠ナデ。内面は笠ケズリとし、胎上に2,3mm大の石粒を含み、赤褐色を呈する。83は、内外面に板状施文具による調整痕がみられる。底面は凹み底で堅緻なつくりであり、立ち上がりは大きく開く。84は、外面を精緻に磨き、内面はナデを施す。器厚は薄く、やや凹み底。色調は外面暗褐色、内面は灰褐色～暗褐色である。86は、内外面ともナデ調整を施し、底面は丁寧に磨きを施す。87は、底面がやや張り



第18図 土器実測図(5)



第19図 土器実測図(6)



第20図 土器実測図(7)

出した粗製の底部。外面は条痕、内面はナデによる調整である。88は、外面に輪積み痕がのこる粗製土器の底部。内面はナデ、底面は凹み底を成し、窓調整とする。胎土に蜜母、2,3mmの大石粒を含む。89は、底部が高く、やや凹みを呈した粗製底部。外面に2枚貝による条痕。内面はナデによる調整を施している。内面に煤が付着し、外面は茶褐色を呈する。91は、底部部分が外側に凹く張り出した凹み底。94は、底部外面が外にふんばった格好の粗製土器。外面は2枚貝による条痕調整で、内面はナデ仕上げ。胎土に多く石粒を含み、内面は煤による暗褐色。外面は真褐色を呈する。

その他の遺物（第21図・図版15）96は、本遺跡から20m上流（南方）側で表採された弥生前期土器。胴部外面に竪書きによる平行双線、その間に竹管による2列の円形刺突文、下間に段を有しハケ目を施す。内面は1寧にハケ目やヘラ磨きで調整する。胎土に石粒を多く含み、酸化鉄が付着しているため外面は茶褐色を呈する。

97は、SX12号中から出土した上偶（第8図）で、頭部・腕部・胴部下半が欠損する。箒状工具で成形の後、丁寧にナデを施す。欠損部の胸部の厚さ1.7cm、幅1.6cmを測り、その断面はほぼ方形を呈する。胎土は緻密で、黄褐色～黄橙色である。出土状況（集石上）からみて、坪墓とは捉え難い。

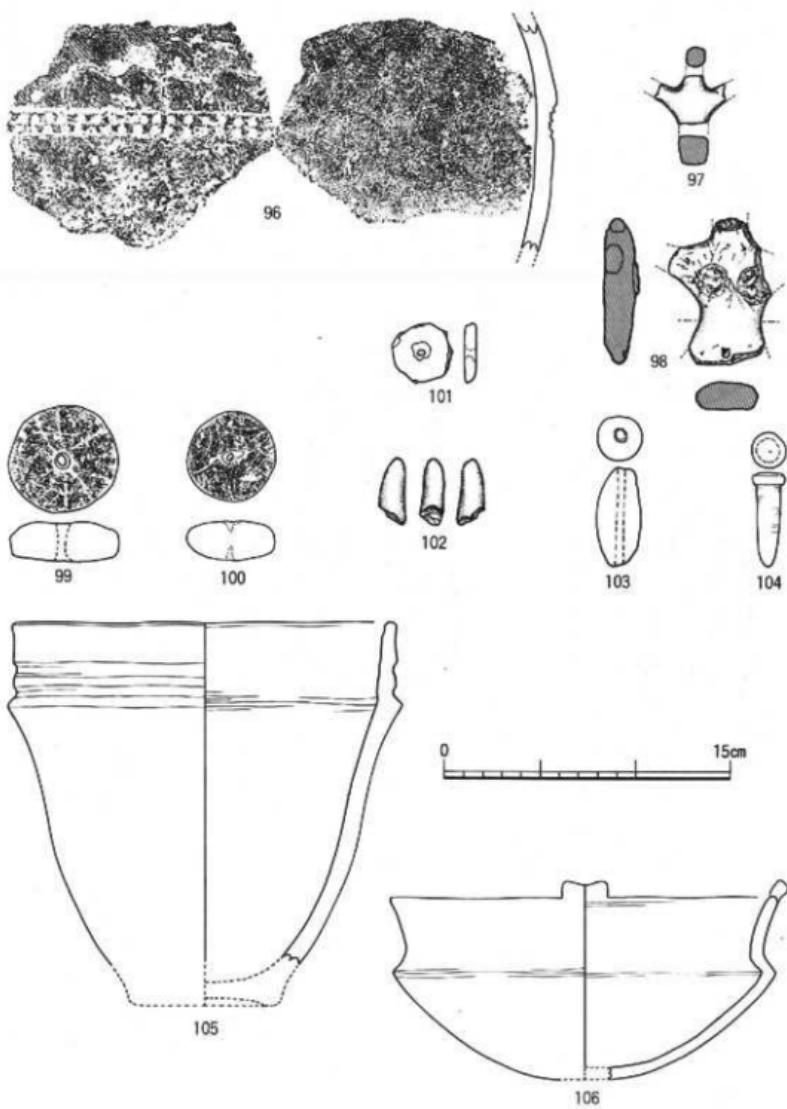
98は、本遺跡に隣接する南西面（第3図）で採集（藤井智宏氏）された土偶。頭部・腕部・乳房・下半身が欠損し、性器と思われる部分はU形を呈し凹んでいる。胸部に放射状の刺青と想定される刺突を施す。裏面は平坦であるが、表面は立体的に表現され、全体的に精緻である。焼成はきわめて良好で、橙褐色を呈する。

99・100は、円盤型線刻土製品。前者は直径5.5～5.8cm、厚さ2.2cmを測り、中心部に穿孔する。裏面に放射状、裏面に弧状の連続した線刻が施されている。100は中心部に両面から孔を有し、3,4条のS形の線刻が施されている。両者とも茶褐色を呈し、胎土には2mmの大石粒を含む。

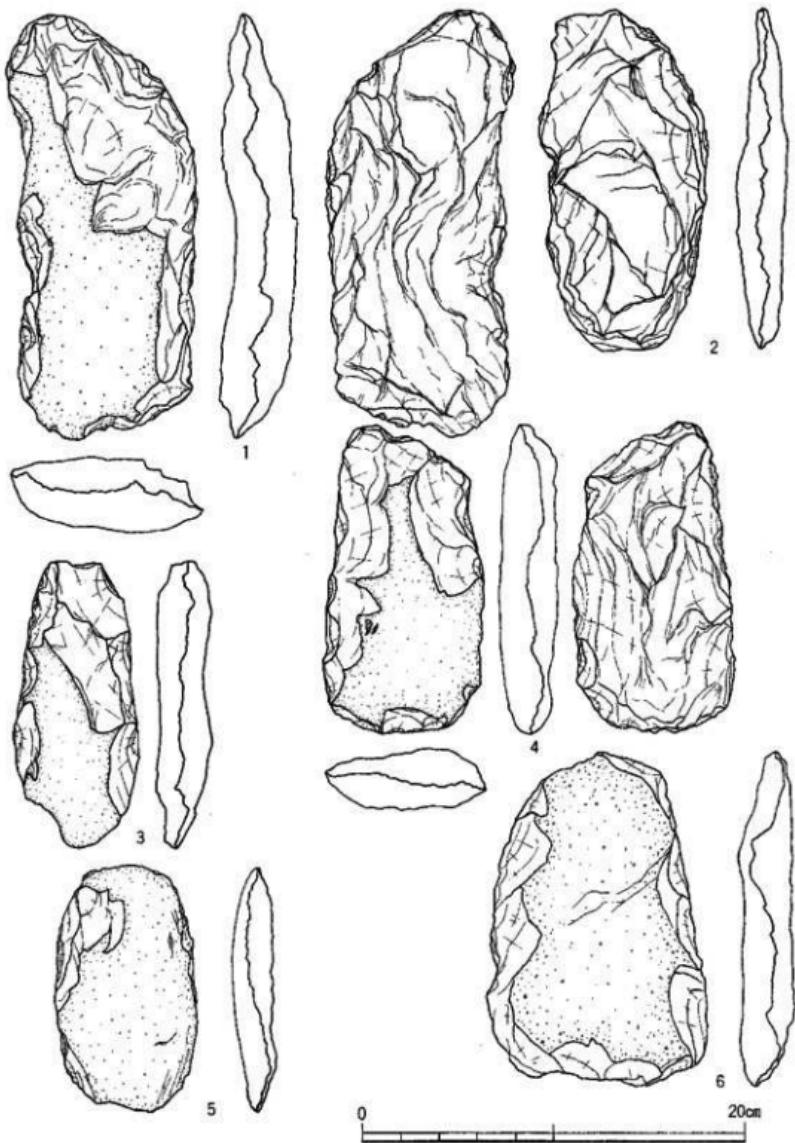
101は、有孔円盤形土製品。直径2.8～3.2cm、厚さ約0.5cmを測り、板状を呈する。中心部分に約0.4cmの孔を有し、磨研土器を代用したものと思われる。102は、欠損した棒状土製品で表面を窓調整する。103は、2層客土に出土した菱形土器。104は、2層客土に出土したトチンと思われる釘形土製品。焼成は須恵質で、青灰～青茶色を呈する。

105は、B地点（本地点80m南東側）で採集された深鉢土器。口縁部外面に2本の凹線を施し、その下部に折曲部がある。内外面とも巻貝による条痕調整とするが、口縁部はナデ調整である。色調は灰褐色を呈し、胎土に石粒を含み、全体につくりが粗い。106は、前者と同様。B地点（第3図）採集された浅鉢土器。口縁端部にリボン状突起をもち、クラシック状に折曲し、底部は丸底と思われる。外表面は精緻に研磨され、色調は灰黒色を呈する。時期的には105は縄文後期後葉で、106は古墳文化出現前の晩期中期のものであろう。

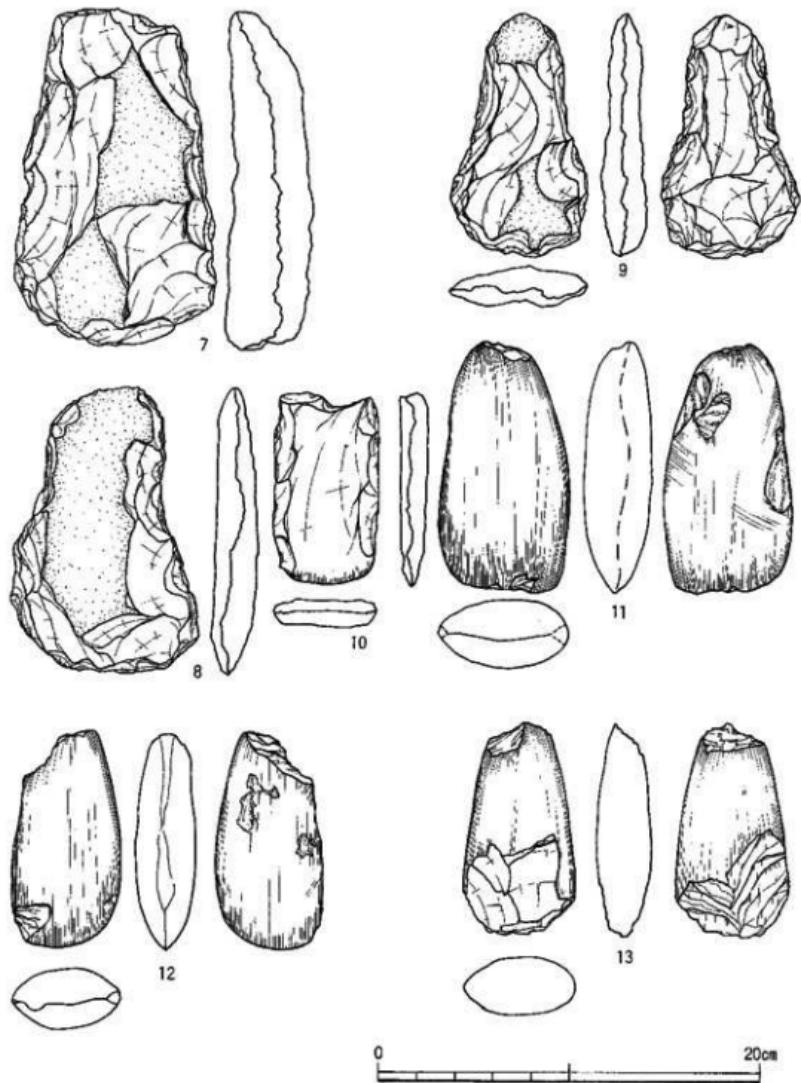
石器（第22図～25図・図版16図～18図）1～9は土掘貝。石質のほとんどは玄武岩であるが、



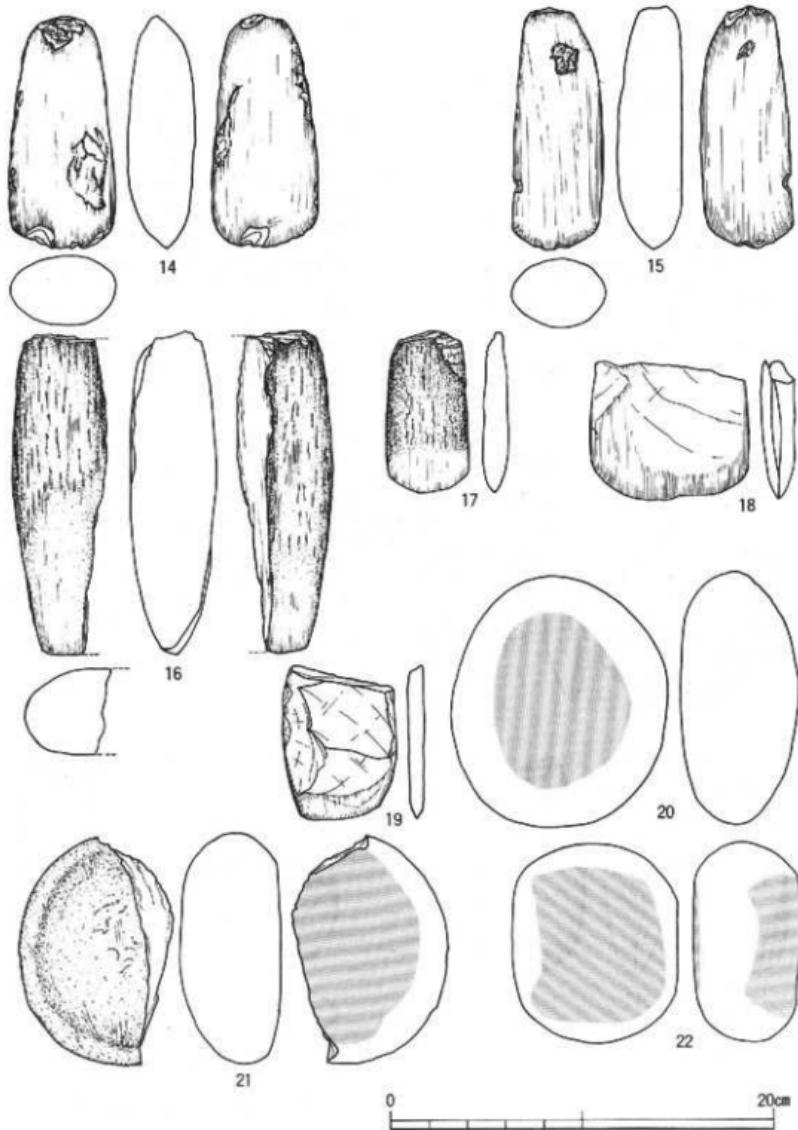
第21図 その他の遺物実測図



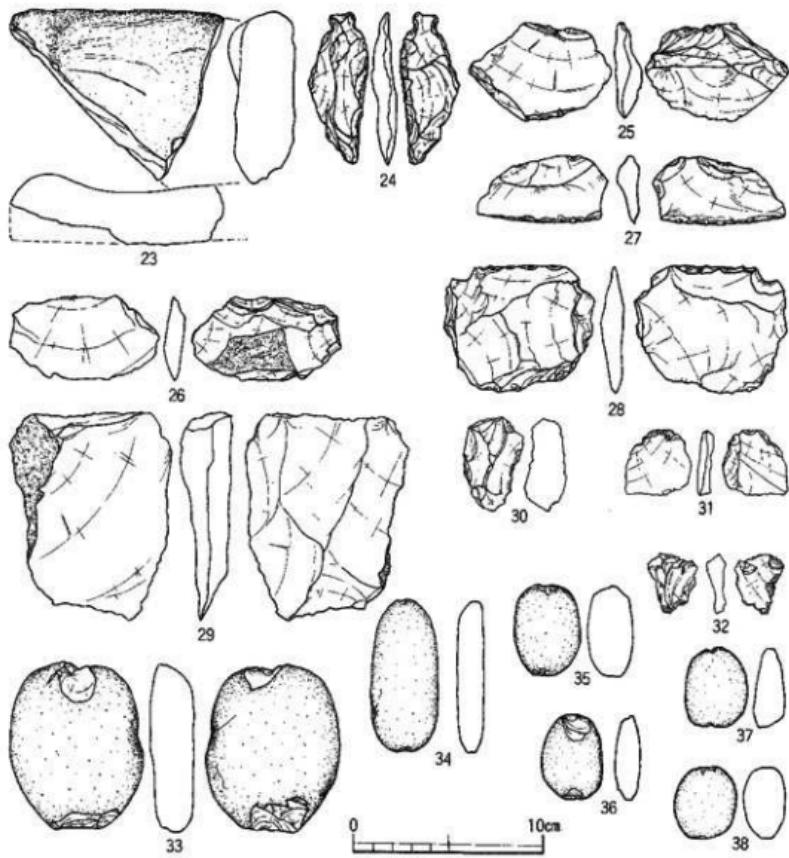
第22図 石器実測図(1)



第23図 石器実測図(2)



第24図 石器実測図(3)



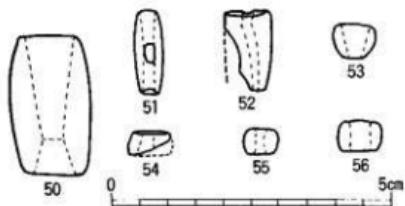
第25図 石器実測図(4)

6のようすに砂岩もある。1の長さは22.3cm、最大幅9.2cmを測る。背面に自然面が残り、腹面を粗く割裂し、腹面に反る。形態は2のようすに長形橢円を呈するが、3～9は橢形で、8・9は括れが強いものもある。

10～19は局部・磨製石斧等である。そのうち10は局部磨製石斧。石質は玄武岩で、偏平に破砕した後、周縁部に大振りな剝離を加え整形している。11～15は蛇紋岩質の磨製石斧で、そのうち12・15が刃部が橢円形で斜刃を呈する。16は、半碎した花崗岩で、器長17cmを測る。17は、軟質の砂質片岩。18・19は、半折した橄欖岩質の局部磨製石斧。

20～22は、花崗岩質の磨石。そのうち22はABトレンチ4層から出した石器製作としての打裂・研磨用の加工石器である。23は割裂した砂岩類の石皿。24は玄武岩質の縦形石匙。板状に割裂した後、薄片面はそのままとし、厚片面側に表裏から僅浅の細部剝離調整を施している。25～28は横形削器。いずれも凸刃で、背部より広く、薄片面を刃部としている。また27は刃部に丁寧な剝離を両面に加え、28は両面調整石器といえるもので、玄武岩質である。29は、玄武岩質の板状形石核。30～32は石器剝片で、そのうち30は乳白色の黒曜石、31は、ガラス質安山岩、32は黒色の黒曜石で、後者の2点の出土は僅少である。33～38は、河原石を利用した石鍤。そのうち33は、長イキ8.8cm、短部7cm、最大厚2.4cmを測り、38は長径3.8cm、短径3.2cm、最大厚2.3cmを測り、前者より小型で球形を呈する。

39～49は石鎌。石質は玄武岩が大半であるが、42のようすに乳白色の黒曜石もある。基部の多くは44のようすやや突出気味のものもみられる。また脚部の上部がやや抉れたようなもの（45）、あるいは46のようすに尖頭器状のものも検出されている。



第26図 玉類実測図

した管玉。材質は蛇紋岩で、緑褐色を呈する。53～56は、臼玉形の小型玉類。そのうち53は翡翠、56は滑石である。

50～56は玉類（第26図・図版18-2）。50は、C区3層上面に出土した棗玉。長さ25mmを測り、最大径は15mmで、孔は広く漏斗状を呈する。材質は翡翠で、全面を精緻に研磨する。51は、B区3層上面で出土した管玉。やや中央部がふくらみ、その中芯と外側に穿孔されている。長さ16mm、最大径は6mmを測り、材質は長崎翡翠と呼ばれているもの。52は、ややふくらみをもつ根塵した管玉。材質は蛇紋岩で、緑褐色を呈する。53～56は、臼玉形の小型玉類。そのうち53は翡翠、56は滑石である。

（渡辺友千代）



1. 水田ノ上遺跡遠望(南東から)



2. 発掘状況

図版2



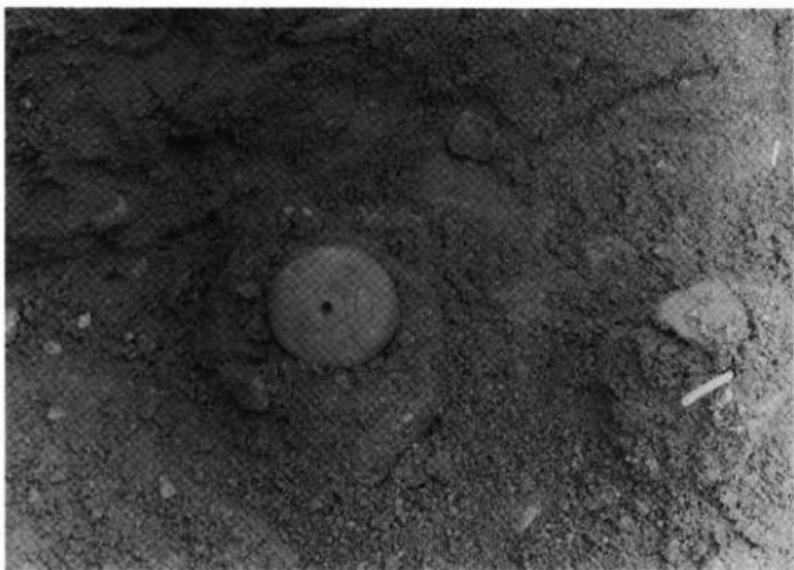
1. 集石内に出土した局部磨製の石斧



2. 集石内に出土した骨片



1. 玉の出土状況(C区)



2. 円盤形土製品の出土状況

図版4



1. AB トレンチ(南西から)



2. C トレンチ層序状況(南西から)



1. B区配石状況(北東から)

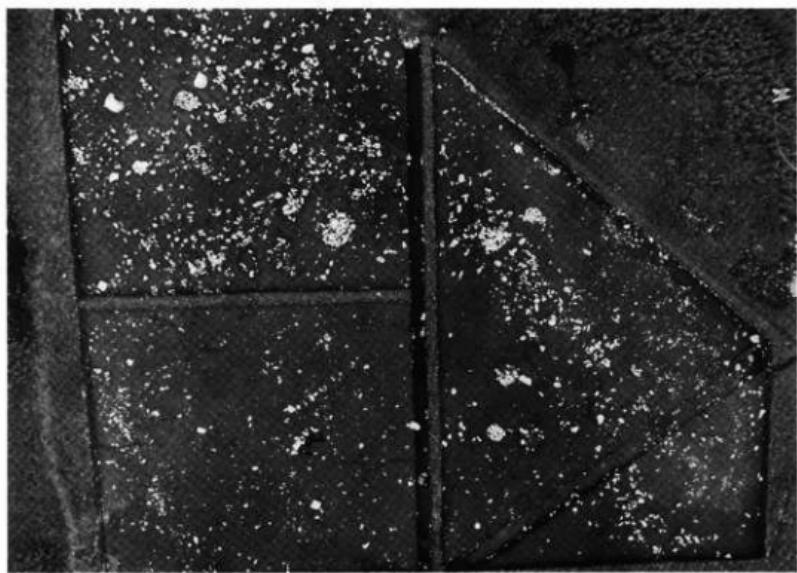


2. C区配石状況(北東から)

図版 6



1. C区配石に見られる立石(北東から)



2. 気球から西方向に見た配石状況(右下に円形状のサークルが見える)



1. SX06(北西から)



2. SX08(東から)



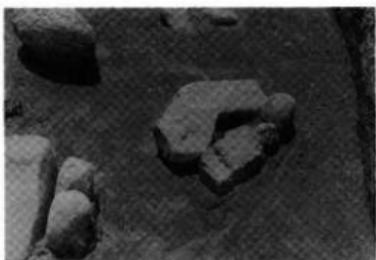
3. SX09(東から)



4. SX12(東から)



5. SX21(東から)



6. SX39・SX40(北から)



7. SX27(東から)



8. SX28(東から)

各
集
石
・
粗
石
な
ど
の
出
土
状
況



1. 方形土坑内の配石出土状況(北西から)



2. 土坑内に出土する石塊状況(方形土坑)



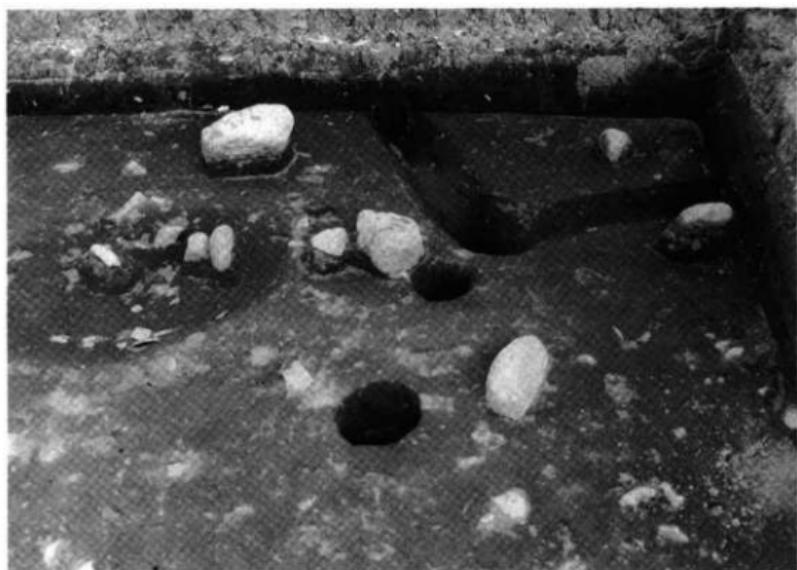
1. C トレンチ壁に表示した集石土坑(SX05)



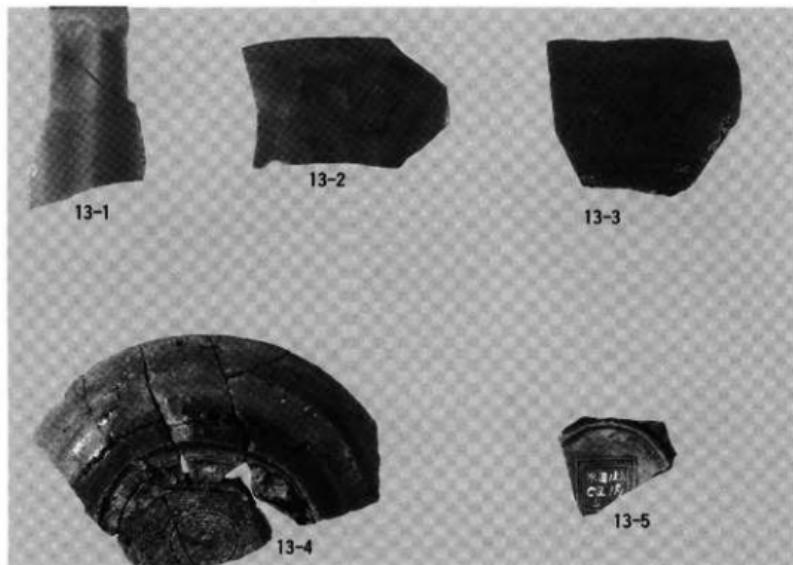
2. 土坑SX04・SX05の完掘状況



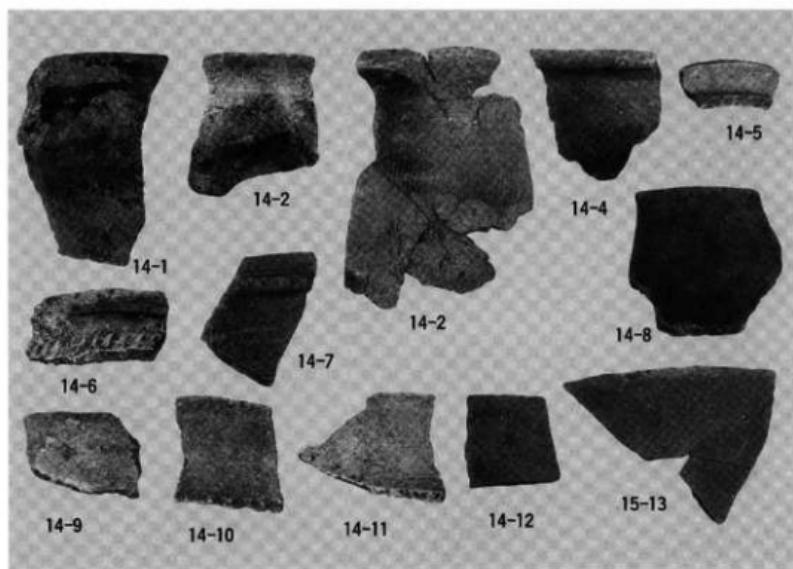
1. 拡張区完掘状況(北から)



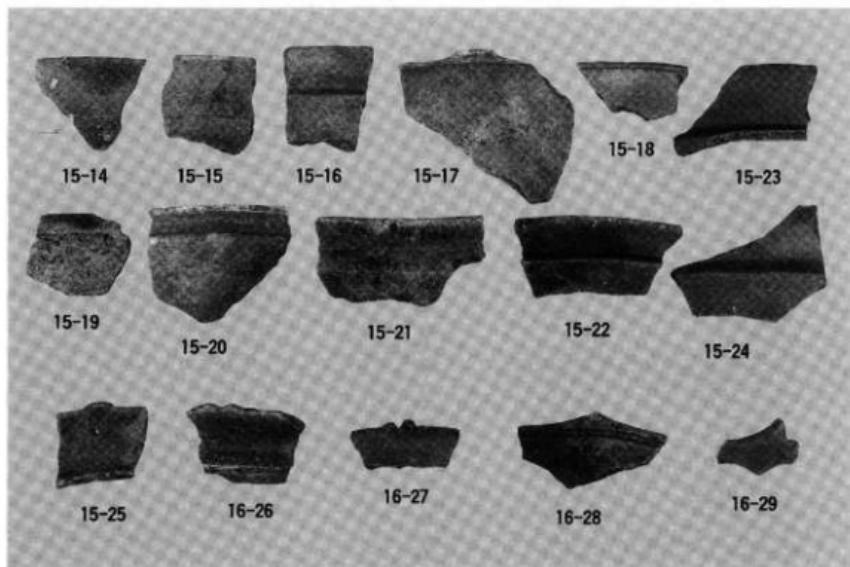
2. 拡張区に検出された各遺構(南東隅)



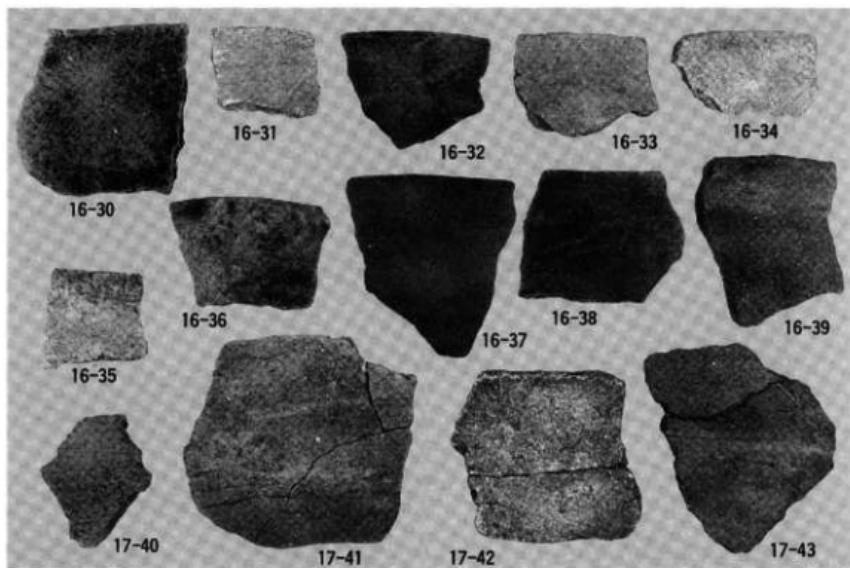
1. 陶磁器類



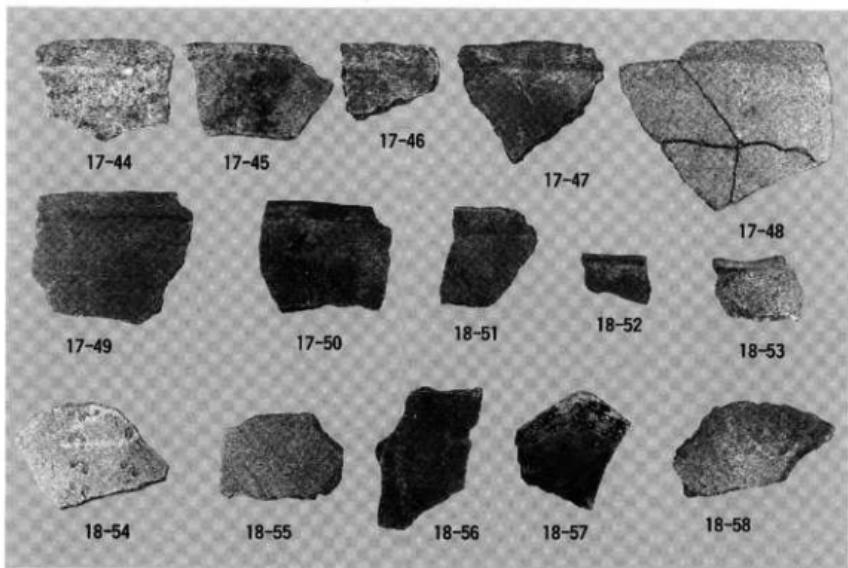
2. 土 器(1)



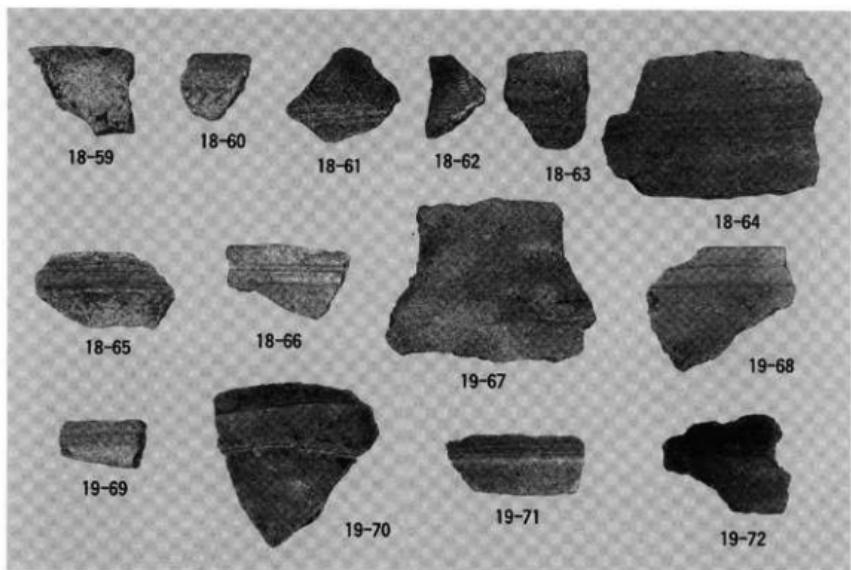
1. 土器(2)



2. 土器(3)

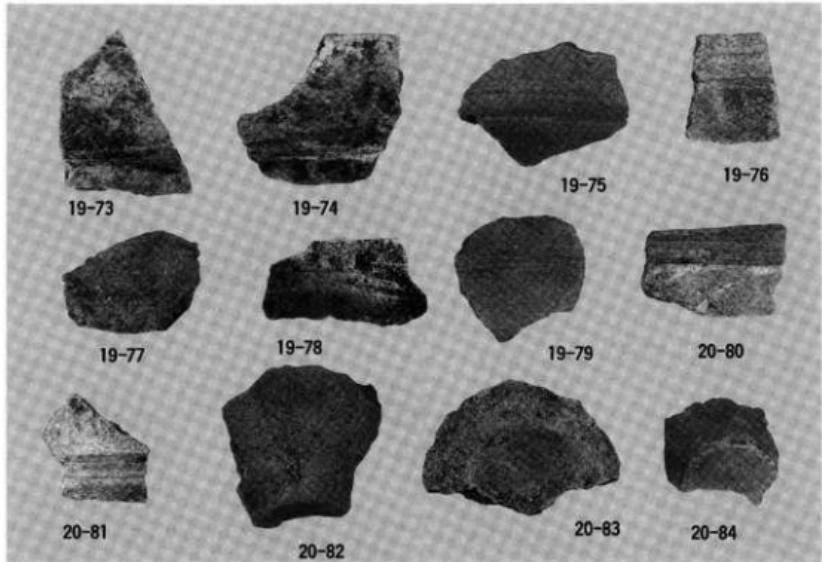


1. 土器(4)

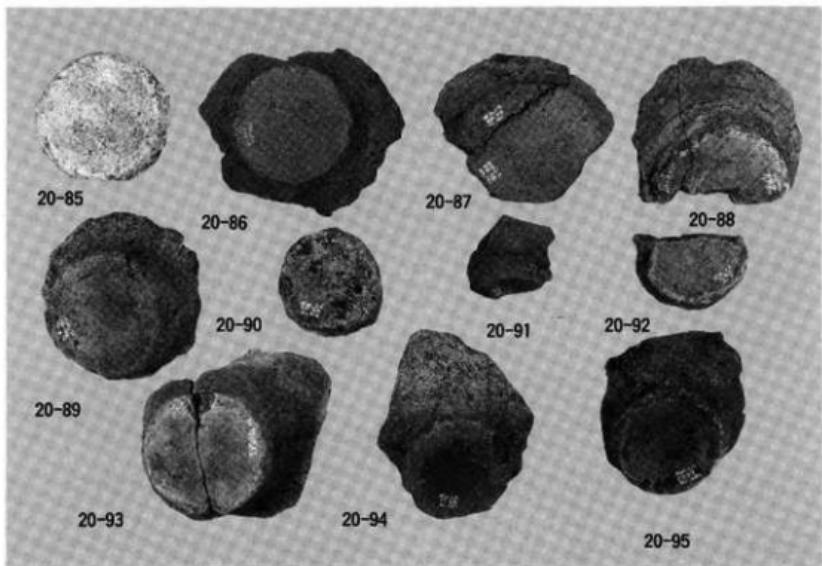


2. 土器(5)

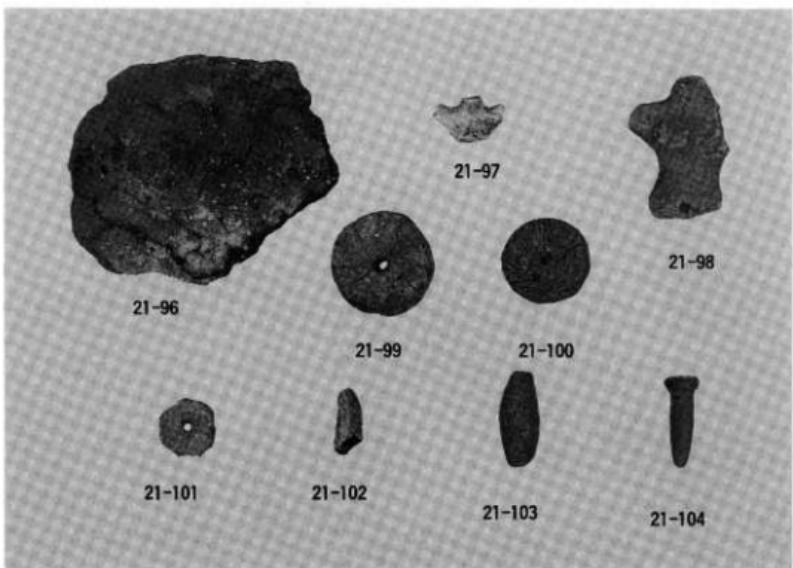
図版14



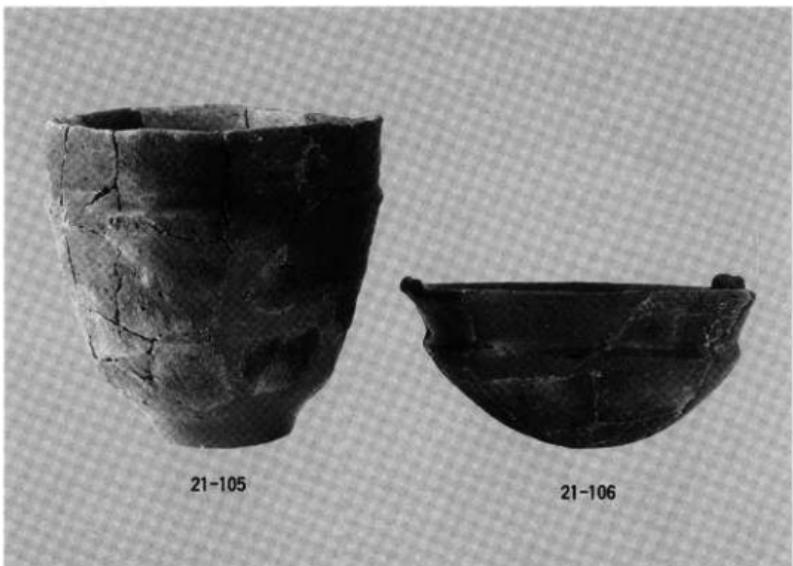
1. 土器(6)



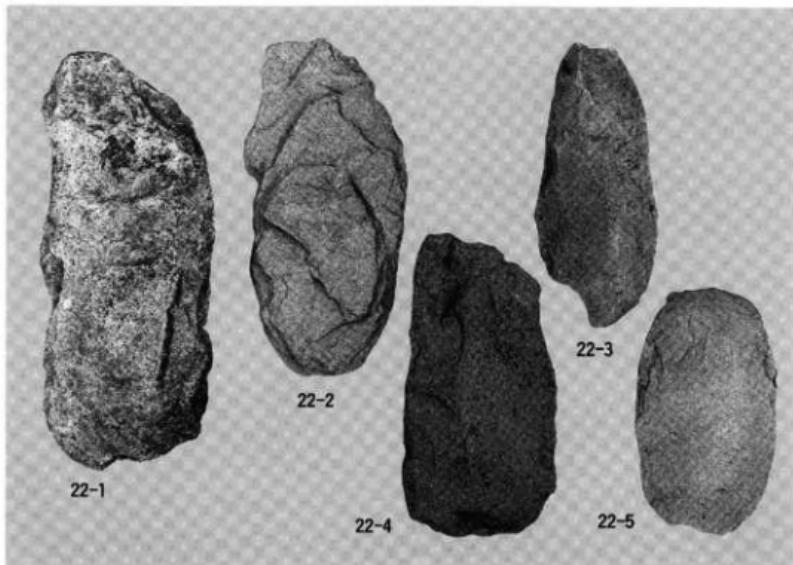
2. 土器(7)



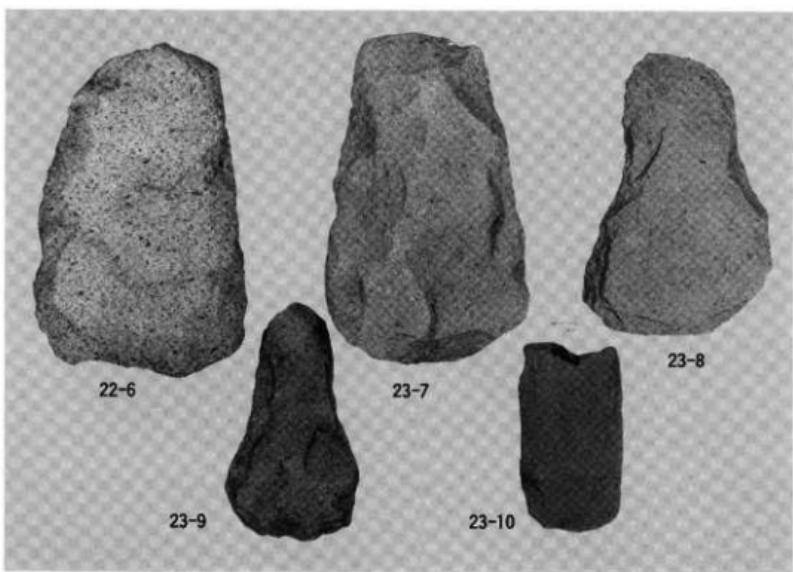
1. その他の遺物



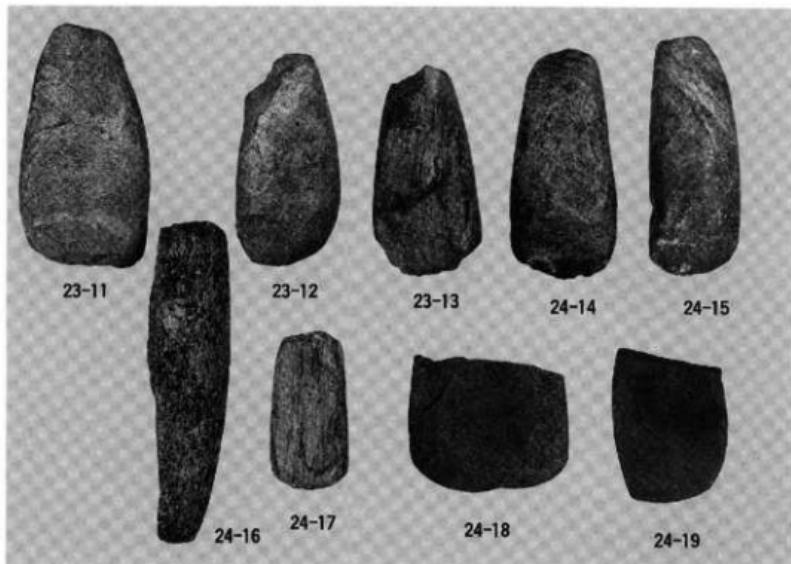
2. B地点で採集した深鉢土器と浅鉢土器



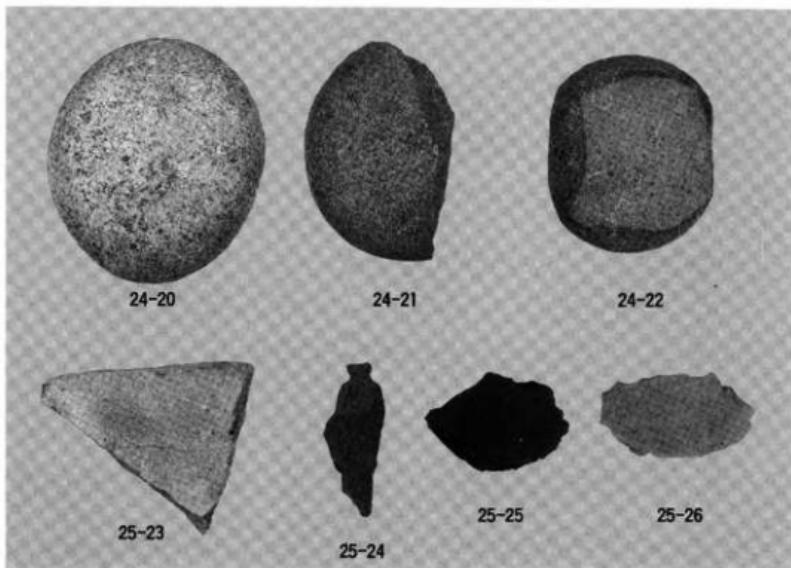
1. 石器(1)



2. 石器(2)

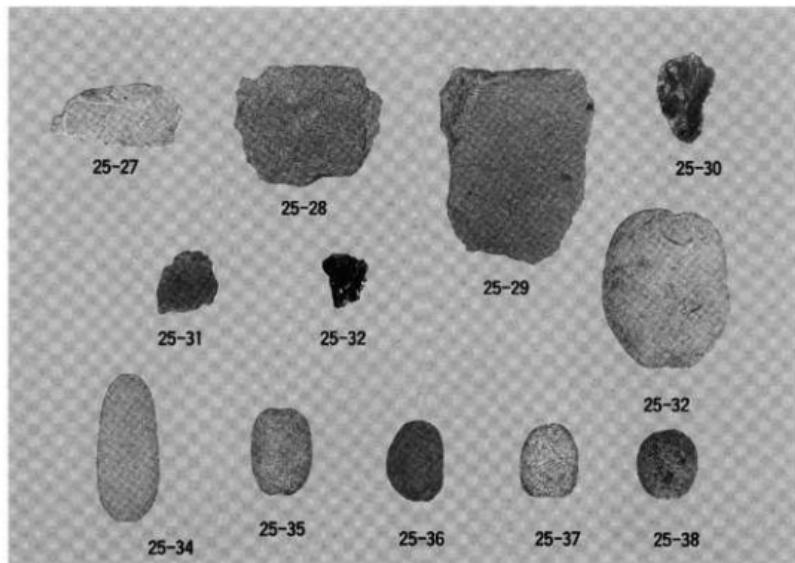


1. 石器(3)

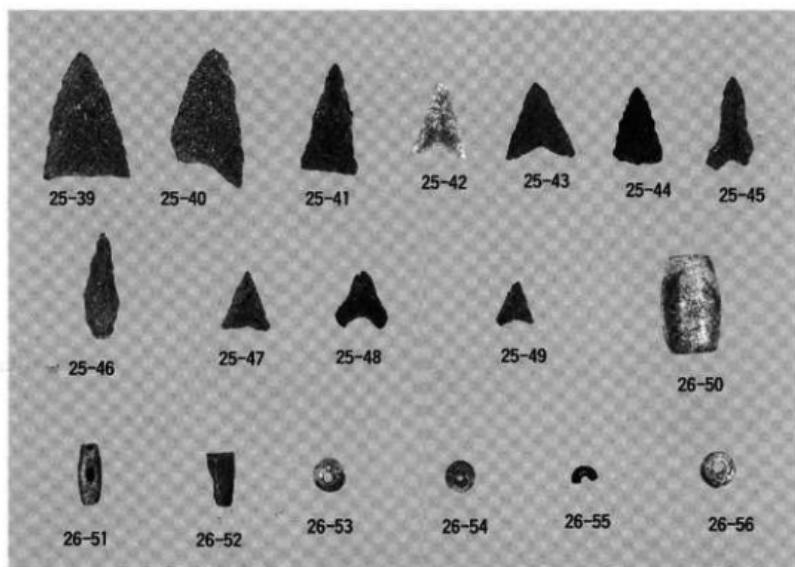


2. 石器(4)

图版18



1. 石器(5)



2. 石器(6)

第4章 長グロ遺跡



実測風景

挿図目次

第1図 調査地点位置図	68
第2図 長グロ遺跡配置図	71～72
第3図 長グロ十層断面図	73
第4図 長グロ遺跡遺構配置図	75～76
第5図 長グロSI11住居断面図	77
第6図 長グロ住居深層図	79～80
第7図 遺物実測図(1)	84
第8図 遺物実測図(2)	85
第9図 遺物実測図(3)	86
第10図 遺物実測図(4)	87
第11図 遺物実測図(5)	88
第12図 遺物実測図(6)	89

図版目次

図版1	1. 遺跡遠望（南東から）	2. 遺物出土状況（A区北西面）
図版2	1. SJ03のカマドと石塊	
	2. 柱穴・溝状土坑検出状況（SI10・SI11周辺）	
図版3	1. SI01のカマド（西から）	2. SI03のカマド（南西から）
	3. SI04のカマド（北から）	4. SI06のカマド（南西から）
	5. SI09のカマド（東から）	6. SI11のカマド（南東から）
図版4	1. 補強石検出状況（P11・P05）	2. 磐盤出土状況（P98）
図版5	1. 北西から見たSI05完掘状況	2. 北西から見たSI07石塊
図版6	1. 西から見た完掘状況	2. 気球から見た鳥瞰
図版7	出土遺物(1)	
図版8	出土遺物(2)	
図版9	出土遺物(3)	
図版10	出土遺物(4)	

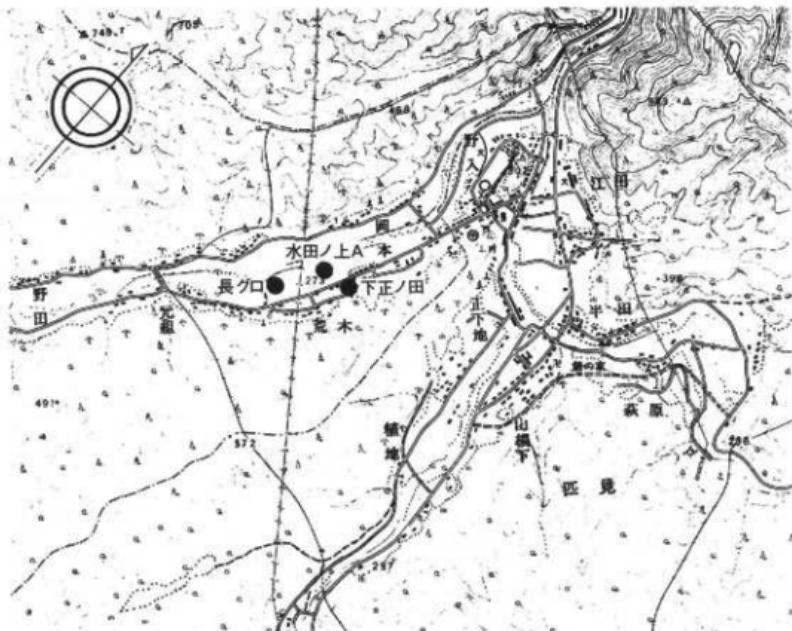
第1節 はじめに

1. 経緯

本遺跡は、県営圃場整備事業に先立って、平成元年度国庫補助事業として行った町内遺跡詳細分布調査で確認されたものである。それにもとづいて本調査は、平成2年度に島根県益田農林事務所の委託を受けて匹見町教育委員会が行ったものである。

2. 位置と立地

本遺跡は、島根県美濃郡匹見町大字紙祖（イ226）字元組に所在し、北東—南西に走る顯著な断層谷に位置する。その断層谷に沿う紙祖川は、南西側を浸蝕蛇行した後、西端を比高約8m測って北東流している（第1図・図版1-1）。



第1図 調査地点位置図

紙祖川の東岸に立地する本遺跡は、200m南東に山裾がせまっているものの、河岸段丘がのびる北東面は水田地が拓け、下流域には本報告する水田ノ上遺跡・下正ノ田遺跡などが点在する。また

一方、南西側（上流）は暫時の浸蝕蛇行がみられ、可耕地は少ないものの狭長な河岸段丘がつづき、上流1.5kmの地点には著名な石ヶ坪遺跡などが存在している。

第2節 調査の概要

1. はじめに

調査は、平成2年6月4日から同年7月17日までのうち26日間、187人役を費やして行ったが終盤で盛土保存が決定したため、全面発掘には至っていない。

また現地表面標高約273.04mを測る本遺跡は、紙祖川下流方向にやや（5m程度）傾斜するものの、ほぼ平坦を成す水田地である。

2. 調査区の設定

調査は、前年度行った分布調査でおおよその範囲が把握されていたので、まず基準となる基点杭を南東面に任意に設定した。そして磁北に13m測った地点に「B区北東杭」と呼称する杭を打ち、さらに北東杭から西側14m測った地点に「B区北西杭」と称するものを設けた。また南西面は基点から西に14mを測った地点とし、さらに西面は南西杭から磁北に13m測ってB区北東杭に結んだ範囲を区画した。

したがって、調査面積は13m×14mの182m²とし、セクションベルトは基点から磁北に向かって8.25m測った地点に50cm幅のものを縦に設け（第2図・第4図・図版6-2）、その南側をA調査区、北側をB区調査区という地区名で呼称することにした。しかし3層上面の掘削の段階で、特にA調査区（以下A区と称する）の西端で多くの出土遺物が確認されたため、さらにA区のみ西側へ8.25m幅のものを4m延長した。よって最終的には調査面積は215m²ということとなり、変則的な調査区となってしまった。また、層序については既に分布調査で把握されていたので、先行トレンチは極力さけ狭いA1トレンチ・A2トレンチ・B1トレンチ（第3図・第4図・図版6-2）のみとした。

3. 層序

基本土層 本遺跡の基本土層は、灰褐色を呈した1層の水田耕作土。2層は0.5~2cm大の石粒を含んだ灰色土。3層はやや砂質性の酸化鉄を含んだ茶褐色土。4層はやや粘質で有機性の黒褐色土。5層は粘質性の暗褐色土。6層は地山である黄褐色を呈した粘質土（第3図）。

1層および3層がきわめて薄い。これはおそらく上流にあたる南西側に浸蝕蛇行の形跡がみられるように、紙祖川による数次のオーバーフローの成因と考えられる。このことは殊に北東側では顕著で、3層直下に河床標が露頭する地点もみられたことから判る（第4図の北東面）。また酸化鉄を含んだ茶褐色土の3層は、色調から4層の黒褐色土と分層しているが、土質的には同一層と考え

られ、黒色土に酸化鉄が沈着した結果であろう。5層とした暗褐色土は、本報告する遺構面を成す中心的な陥入層である。本層には他層のブロックが確認されているとともに、6層に掘り込まれた様子がセクションからも窺われる（第3図）。

層序と遺物 2層から3層上面にかけて須恵器や上部器等の遺物が多数出土している。これらの遺物は、本遺跡と時期的差異が認められないものの、下位面の各当該遺構との共伴性は層位的にみて結び付けることはできない。これらはおそらく隣接地からの流入あるいは耕作時に混入したものとして捉えられよう。遺物の多出する層位は、4層から5層上面で、5層中位面に陥入したと想定される圓文土器・石器等が若干検出された。

第3節 遺 構

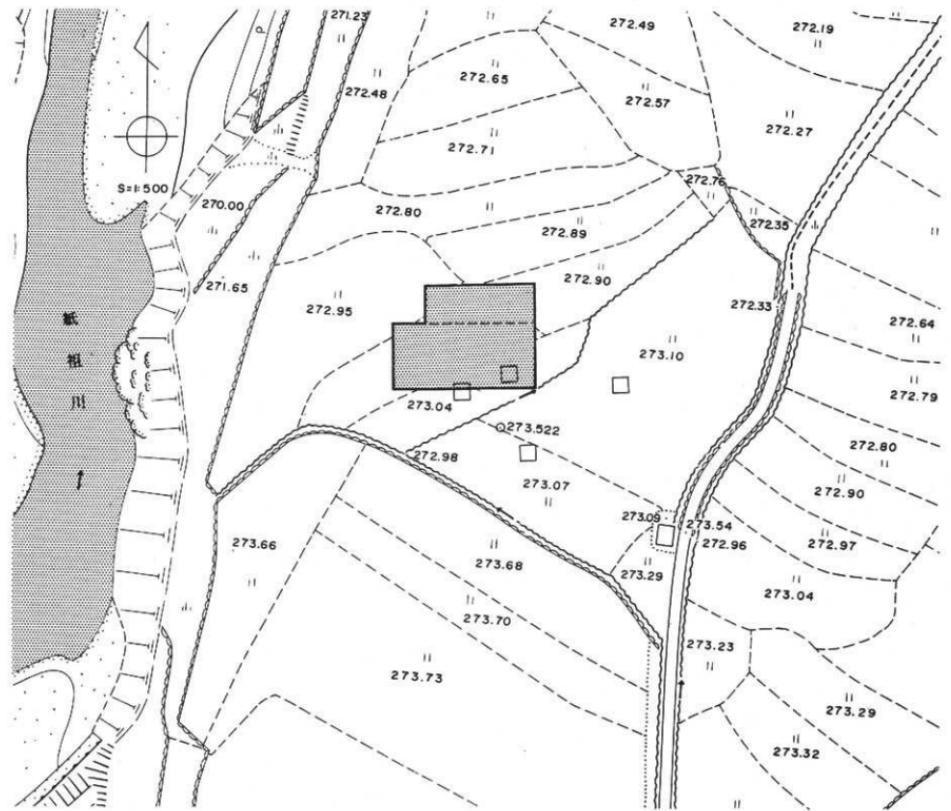
1. 住居址（第3図・第4図・図版5）

住居址は、11棟を確認した。そのうち3号-4号・6号-7号-10号・8号-9号は重複しており、すべて方形の竪穴式住居跡である。また、周溝は部分的に検出されているものの側溝については、いずれも確認することができなかった。

SI01 南東端に検出された住居址で、北東壁のはば中央と思われる壁際にカマドを付設する。壁高は北西半を中心に7~10cmを測るが、南東面に向かって次第に低くなる。しかし北東面に南西列する2柱穴の状況から、その柱列が南東壁の境付近に当該するものと思われる。そうするとおおよそ規模は3.2m×4.3mとなる。また壁柱と想定される柱穴は一部検出されているものの、等間隔的な柱穴は不明。床面は客土と考えられる橙黄粘質上で鋪っており、おそらく下位の砂礫質との間に張られた貼床であったかもしれないが、精査していないので判らない。

SI02 SI01の北東壁に併列して部分的に検出された住居址で、床面は地山である黄褐色粘質土。壁高は南西面を中心に壁高3~5cmを測るが、その境界はやや不明確である。南西側に不規則な3個の柱穴、また南西壁にも1穴みられるが、本住居址に伴うものは判らない。

SI03 北西半がSI04と重複して検出された方形竪穴住居跡。残存壁体部の高さは16~20cmを測り、比較的の垂直で、床面の短軸2.8m、長軸3.2mを測る。北東壁のはば中央部にカマドが付設され、対壁の南西面に堆積した炭塊が検出された。その炭塊は短径50cm長径90cmを測り、長楕円形を呈する。堆積高は頂部から床面にかけて17cm測り、断面は四形錐台状を呈する。また坑内を中心に10~30cm大の石材が20数個散在し、土柱と思われる柱穴が壁寄りに3穴検出された。南西側の壁上にやや小さな柱穴がみられるものの、北東半には確認されていないことから、本住居址に伴うものは不正確である。切り合いの関係からみてSI04よりは新しいと判断した。



第2図 長グロ遺跡配置図



第3図 長グロ土層断面図

SI04 調査範囲のほぼ中央、中央ベルトにかかるて検出された住居址。堆定短軸（北西—南東）約3m、長軸（北東—南西）約3.8mを測る。壁高は10~17cmを測り、南西半の壁は逆「U」字状を呈し低く、北東半は僅か傾斜するものの高い。また南西壁沿いにカマドが付設され、3穴の柱穴ほか、10~30cm大の石材が床面に数個検出された。

SI05 A調査区の中央部に検出された方形竪穴住居址。短軸（北西—南東）の壁体間は約3m、長軸（北東—南西）は3.8mを測り、北東隅に方形状の張り出し部、北西壁には半円状の張り出し部が確認された。前者は長軸約1.3m、短軸約1m、壁高22cmを測り、長方形を成す。また壁面は傾斜し、底部は平坦で、床面より2~3cm高く加工段の様子を呈している。後者はSI06の張り出し部と接し、半円状を呈する。壁面側の幅約80cm、径約36cmを測り、その傾斜は緩やかである。このような張り出し部、あるいは加工段を呈したものは他にSI06やSI-11でもみられ、おおよそカマドと対面している（図版5-1）。

カマド址は南東壁にあって、長さ約1.8mを測る煙道をもつ。壁際のカマドには袖石はみられず、住居内にも1個の石材も検出されていないことから、廃墟以降抜き取られたものと判定された。煙道幅は約60cmを測るが、奥行約1m部分は不整形に広がって（幅約1m）おり、検出面差13cmを測りやや深い。壁面は焼土で赤褐色を呈し、焚口には、炭塊が散見された。また、柱穴は壁面を中心検出されているが、北東隅の方形張り出し部縁辺の4穴は、たとえば出入口の施設といったような機能的意味をもつ柱穴かもしれない。

SI06 本住居址の検出した平面形はやや菱形を呈しているが、ここは発掘に問題があったかもしれない。それは北西半、殊にA調査区の西端面では暗褐色の5層が欠落していて、以下は疊層となっているため、不充分な見究めしかできなかったことから生じたものと考えられる。つまり紙祖川の数次による局地（A調査区西端部・B調査区北東面）的流出（図版6）などの擾乱的序層を把握しきれていたかったことにあったかと思う。

規模はおおよそ3m×3.4mで検出面の高低差は5~9cmを測るが、北東壁面の境は不明確であっ

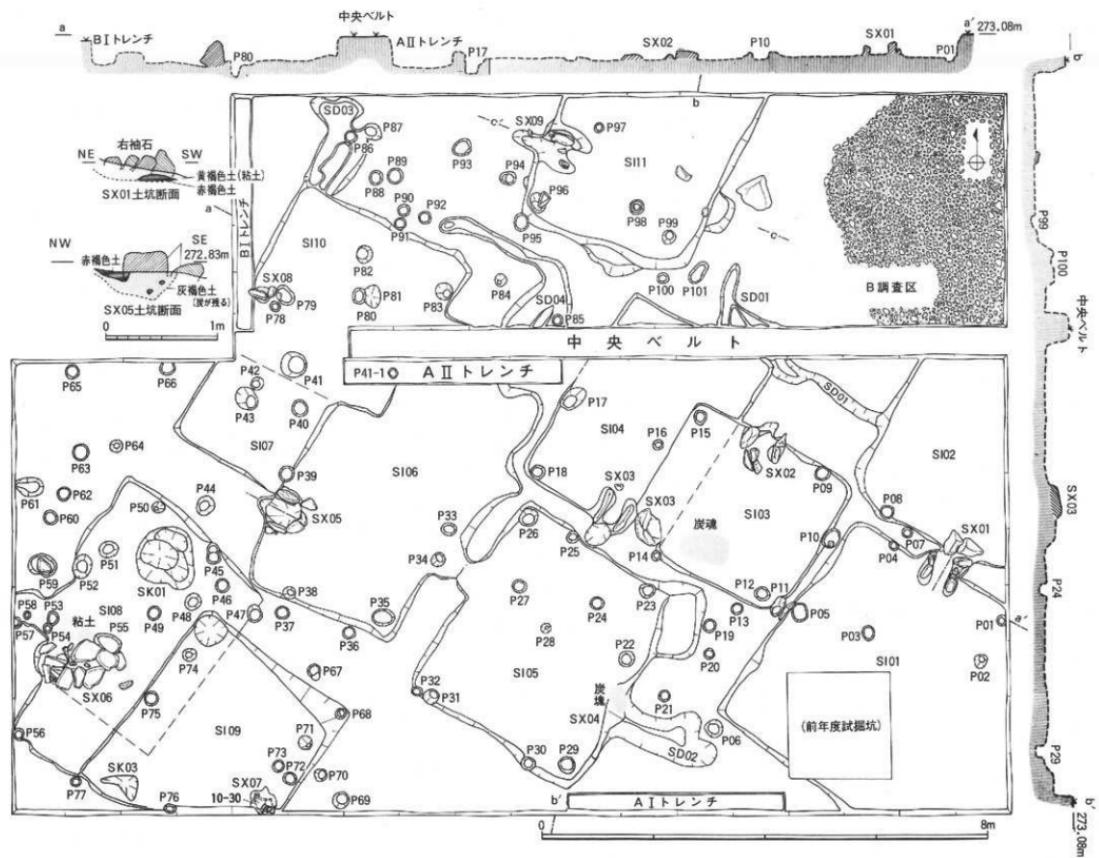
た。しかし南東壁の北東半にかけては造成された様子が窺われることから、カマドの間隔的位置からみて、後に長軸約4.6mに延長された増築とも考えられたが、重複かも知れず、切り合い関係の見定めの不手際から詳細については判らなかった。なお、カマド側に対面壁する張り出し部分は、2穴の柱穴間隔からみて、出入口と想定される。

SI07 SI07と略号した住居址は、SI-10に付設されているカマドの間隔的位置からSI-10の増築部分か、あるいは1棟を成すものと考えられた。やや暗褐色を呈していることや柱穴径の大小の差などから重複と想定できる。下位を時間制約があって精査していないものの、これらの住居址は、切り合い関係からSI07→SI-10→SI06と判断した。

SI08 A調査区西端に検出されたSI08は、5層以下、遺構面以外は河床礫が露出し、暗褐色土・黄褐色土層が流出していた。しかも遺構内の堆積も極薄で、その上部の5層（暗褐色土）上面には河床礫が陥入した部分もみられ、数次の氾濫が層序から把握された。したがって北西面は擾乱されているため、壁面は乱れ、カマドが付設されていた南西壁の南東半も不明確であった。また南東壁は、SI09に削平されており、南西壁の南東半につづくL字状の平坦面は機能的にも意味付けができなかった。

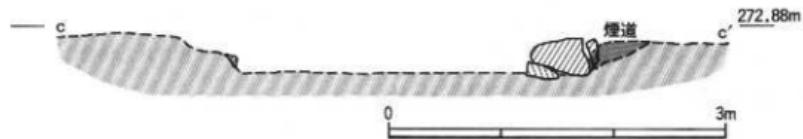
住居址の部分的形状からみて、短軸長約3.2m、長軸約3.7mの方形が想定され、残存部の壁高は8~14cmを測る。住居址の北東面のはば中央に3段に掘り込まれた土坑が検出され、その坑底部に3cm程度の黒褐色土。その部上に粘質性の暗褐色土層がU字状に堆積する。共伴遺物から本住居址うもので、その検出面からの深さは36cm、径1~1.2mを測る。柱穴は径15~35cm、深さ10~20cmのものが散在するが、不規則な配列からみて總て本住居跡に伴うとは判断できない。また南西境に散在する石材は、焼石あるいは粘土塊の残存状態、位置などから炉址とはいえず、おそらく作り付けのカマドであったと思われる（第4図）。

SI09 本住居址の北東壁面は、紙祖川による溢流時の波及面と考えられ、高まりをもった円礫を含んだ黄褐色砂上であった。その尾根状の高まりは、SI08の北東壁面に至って砂礫層に変り、床面との最大差23cmを測る。また北西壁はSI08の壁を壊して、その差約3cmを測り、切り合い関係から本住居址は前者より新しいといえる。検出部分の南西壁面は垂直を呈しているものの、特に北東隅縁は傾斜し緩やかである。カマドはSX07、南東壁際のはば中央に検出（図版3-5）され、その袖石との間には半壊した上部器變が伏せた状態で北一南北方向に出上した（上半の袖石はとり除いてしまったので詳細については明らかではない—第4図）。推定住居址の壁体間の長さは、短軸約3.2m、長軸3.9mを測る。また、本住居址には6穴の柱穴とともに円形（SK02）、三角状（SK03）の2つの土坑が検出されており、前者は径約54cm、深さ4cm、後者は深さ18cmを測るが、用途的には不明である。



SI-10 中央ベルトを挟んでB調査区の南西面に検出されたSI10は、カマドを北西壁際に付設する。遺存状態の良好な北東壁・北西壁の壁面は、垂直気味で、壁高18~21cmを測り土質は締っていた。床面は貼床としたものと思われ、その直下は礫があるにもかかわらず（図版6-2のB1トレソチ参照）、床面は粘質性の黄褐色土で平滑になっており、且つ礫等は見あたらなかったことから想定できる。しかし、中央部分には長径15~40cm測る円礫群が幅約1m、長さ約2.2m、最大高約38cmのものが一部積み重なって検出された（図版5-2）。その石群下には土坑は存在せず、下面は暗褐色土が床面より1~3cm堆積し、ブロック状に上位層の黒褐色土も部分的に見られたことから、廃墟以降に廃棄された群石と想像された。

なお本住居のプランについては、特に南面側がSI06等による壁面の破壊によって不明であるが、北西壁に付設するカマドの位置あるいは南西面の色調の差異からおおよそ想像はできた。それによると、約3.2m方形ということになろう。また、発掘していないが中央ベルトにかかるて、部分に検出した南東壁のL字状の張り出し部と想像できるものは、出入口にあたるものかもしれない。柱穴は約16cm、深さ約11cmのものなどが検出されている。



第5図 長グロ遺跡SI11住居断面図

SI11 B調査区の北壁にかかるて検出されたSI11は、周縁部と床面との差20~29cm測り、壁面は傾斜する（第5図・図版3-6）。プランについては、北東壁面側を発掘していないので全体像は明らかではないが、カマドが北西壁面のほぼ中央に設定されているとみると、おおよそ北東壁の境は想定できそうである。そうすると、長軸の壁体間は約3.6mが想定され、なお短軸は約3.3mであった。

検出面は6層の黄褐色粘質層で、本住居に伴うと想定される長径30cm余りの石材が数個床面に検出しているものの、礫はみられなかった。南西隅のP96上で検出の2個の石材は、割裂し焼跡がみられることから、カマド（SX09）の左袖石の転移物と思われ、また径約28cm、深さ13cmを測るP98には、周縁部を整形した板状の礫壁が底面に検出された（第4図・図版4-2）。

カマドの対壁側（南東壁）と南西壁側に張り出した半円状の加工段が検出されている。そのうち前者は幅約70cm、径40cmを測り、底面は床面より14cm上り平坦を成し、壁面は傾斜しながら15cmを

測って壁面に至っている。この加工段からは、ほぼ完形に近い7世紀後葉のものと想定される高坏（第12図・図版10）が傾倒して検出されている。また後者は「3」字状に張り出した加工段で、床面より18cm上り平坦を成し、傾斜する壁面は13cm割って壁体に至る段状のものであった。このような張り出し部あるいは加工段を有するものは、SI05・SI06・SI10でも確認されているが、これらはおおよそカマドの対壁側にあって、出入口の可能性が強いようと思われる。しかしSI05や木住店のようにその遺構が2壁面に確認され、またその1つのSI-11の加工段に整えられたように検出された高坏の様態からは、機能的にも出入口とは異なった別の用途のものが存在した、ということも指摘できそうである。

2. カマド址（第4図・図版3）

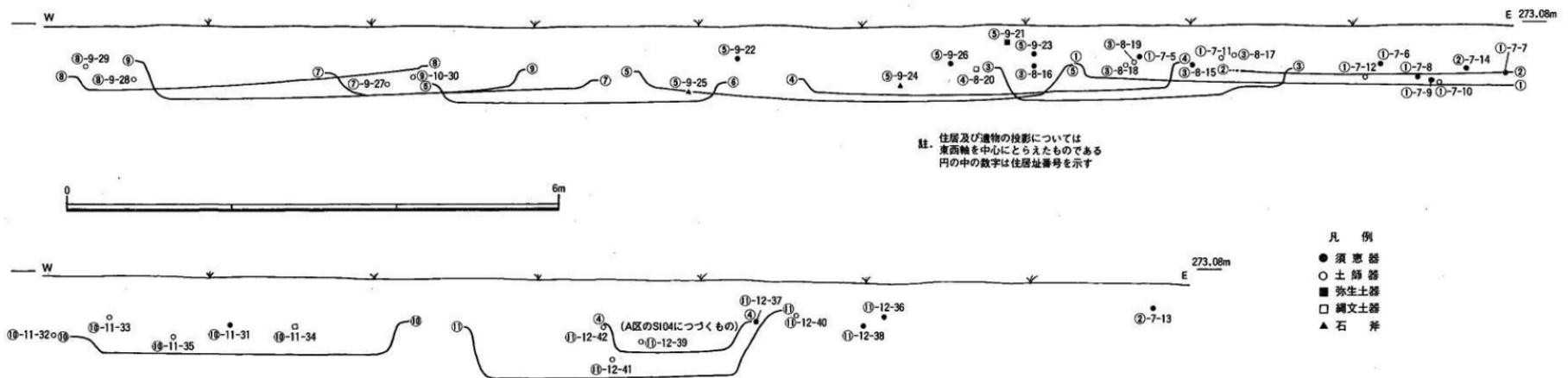
カマド址と明らかに指摘できるものはSXと略号した01～09の9基で、その多くは袖石の下半を粘土で貼り固めているものの上半は露出し、また06・07・08・09のようにそれらが破壊されたもの、04では綴て抜き取られたと想定されるもの等が確認されている。これらの袖石には長さ10～70cmの円錐を中心とした石材で構成されていて、01のような縦方向に組石されたもの、03などのように横方向に組石されたものの2形態があり、凡そ横方向のものは石体が長径で高さについては低いという傾向がみられ、またその配置は連体する。なお、袖石の上面に渡す天井石等が存在したかは明らかではないが、SX07（図版3-5）に半壊した上部器窓を伏せたように検出された状況は、これらを補う形態が存在したのではないかと氣になった。

カマドに伴う煙道は、02（SI02と略号）・03・04・05・09で確認され、そのうち02のものは最大奥行1.8mを測るもので、その検出断面は「U」字状を成す。壁面には茶褐色～赤褐色に焼土化し、奥行1.2m部分の上面の幅約95cm、その低面との差約13cmを測り、やや深く広がっている。09の煙道は、検出上面奥行約50cm、その煙道口の幅約37cmを測る。また他の煙道は、煙道口の幅は大差がないものの奥行は50cm以下で、その土坑形状はいずれもコーヒースコップ状を呈している。

これらの石組カマドの方向は住居址の方向と関連するもので、その住居址では、長軸を基準にしてみると北東～南西という一連の方向性が浮び上がってくる。この方向は、おそらく北東～南西に走る断層谷に即応したものと考えられるが、カマドの場合では長軸壁面に付設されるものが多くみられるものの、02・03のように対向の短軸面にもみられ、その方向は一様ではない。また、これらの方向あるいは住居プランの差によって、新旧関係が明らかになるのではないかと思ったが、切り合い関係と対比した場合、そこには一定の親縁関係をみることはできなかった。

3. 柱穴・土坑（第4図・図版2）

柱穴　柱穴は、検出上面径15～45cmのものが101穴確認されており、その多くは20～25cm測るものであった。中にはP11にみられるように（図版4-1）柱を支えたと思われる補強石といえるもの、



第6図 長グロ住居深層図

あるいはP59・P98（図版4-2）では礎盤が検出している。これらのうち住居址に伴う柱穴とみられるものは、間断的にSI03ではP09・P12・P14・P15、SI05ではP23・P26・P29・P31あるいはSI-11のP96・P99等に確認されているが、いずれも壁際であって不安がのこらないでもない。むしろ相当数柱穴型式ではなく掘立柱遺構の柱穴が介在していると考えられ、それはP12・P19・P22・P24・P86・P88・P91・P83等の直列、あるいはP79・P82・P92・P94・P97・P98・P100等の、直角列穴の状況から窺うことができる。このように床面に検出した不規則な柱穴は、住居に伴うものばかりではなく、一方では柱穴をもたない（礎盤を置く）堅穴住居も存在したことが想定できるが、柱穴内の土壤の色調、堆積、土質等について把握しきれなかったので、明確に判断できない。またSI05のP19・P20、SI06のP33・P34は庇柱穴と考えられる。

土坑 土坑はSK01・SK02・SK03と略号した3坑を検出しているが、いずれも検出上位面は4層の黒褐色粘質層が「U」形状に堆積し、中位面以下には暗褐色土がブロック状に陥入する。そのうちSI08中のSK01は（第4図）、検出上面の短径約1.14m、長径1.2m測る不整形の土坑。坑内は3段からなり、その段状の深さ22cm、24cm、43cmを測り、中位面以下の壁面は黄褐色砂礫層である。住居に伴う貯蔵穴と考えられる。またSI09の北西隅で検出したSK02は、短径56cm、長径59cmを測る梢円形のもので、深さ約7cmと浅く皿状を呈する。位置的にみて柱穴とも考えられたが、径は大きく底面は丸みを呈しているため、別途の機能をもったものと思われる。

SI09の南西隅で検出したSK03（第4図）は、三角状を呈する土坑。坑壁は直線的に傾斜し、「V」字形に掘り込み、深さ約12cmを測る。鋭角的な坑形から柱穴ではないことは確かであるが、機能には不明。

溝状土坑 SDと略号する溝状の土坑は、第4図に符合する01～04の4坑で、そのうち02はSI05に伴う煙道である。

SD01は、B調査区のSI11住居南東側からA調査区のSI04・SI03住居の北東側を通り、SI02住居の北西壁面に続く溝状土坑（図版2-1）。本遺跡は調査中に盛土保存が決せられていたので、中央ベルトに掛かる部分は発掘していないので詳しくは判らないが、屈曲した中途部で分岐した後、再び合体しているものと想定できる。その坑形断面は「U」字形を成し、その深さ3～11cm、検出面の長さ約4.2mを測る。検出面は周辺遺構面と同様、黄褐色粘質土層であるが、本坑の進走状況からみて、他の遺構との相関性については判らなかった。

SD03はB調査区の北西侧から、SI10の北西隅にかけて検出された溝状の土坑（図版2-2）。坑形はステップ状を呈し、角部はコブ状に広がり、その深さは12cmを測る。坑内にはP86・P87の柱穴が検出され、前者の柱穴の深さは58cmを測り、後者は12cmと浅い。また、この溝状土坑は南西に向かって掘り込まれ、その端部は約15cm測って深くなっている。SI10住居床面と同位面と考えら

れるが、その進歩状況からみると、どう判断すべきか問題がのこる。

SI04（第4図・図版2-2）は、SI-10・SI-11住居の間、SI10住居を「L」字状に囲繞して検出された土坑。深さは12~16cm測り、その溝状は南東（中央ベルト）端面で分岐し、やや深く掘り込まれている。坑内には5層の暗褐色土層が堆積し、その断面は「U」字状に掘り込まれ、北西端は21cm測って陥ち込む。

第4節 出土遺物

1.はじめに

本遺跡から上部器片772点・須恵器片145点・繩文土器片5点・弥生土器片3点・土錐3点・打製石斧3点・打欠石錐8点・石鎌1点・石器剣片・碎片35点・炭化物12点・鋼鉄器類9点などの約1,600点もの遺物が出土している。

2.出土遺物

耕作土・客土出土遺物（第7図・図版7） 1~4は、耕作土及び客土から出土した須恵器。そのうち1は、△調査区の客土から出土した蓋。天井部は平坦で、肩部に段を有してくびれ、口縁部はほぼ水平。端部は下垂し、その断面は鳥嘴状を呈する。頂部に径6.8cmの外傾する輪状つまみをもち、全体に薄手である。調整は内外面とも回転ナデの後、天井部内面を不整方向の静止ナデを施す。色調は灰褐色を呈し、外面に淡緑色の自然釉が付着する。2も1と同様形態のものであるが、1に比べてやや厚手で、器高は高く3cmを測る。3は、体部が底部から直線的に斜めに立上がる杯。端部は丸みをおび、高台はやや外傾し、その接地面は水平である。内外面とも回転ナデの後、内面底部を静止ナデとする。色調は青灰色を呈し、胎土には歛砂を含むもののきわめて緻密である。4は須恵器の剣部片。内外面をタタキ目で成形した後、外面をカキ目で調整したもの。

SI01住居出土遺物（第7図・図版7） 5は、4層から出土した蓋。天井部は平坦を成し、肩部はやわらかく屈曲して口縁部に至る。口縁端はやや内傾気味で、その断面は鳥嘴状を呈する。頂部にはボタン状のつまみが付けられていたものと思われ、円形に毀れている。6は、4層から出土した蓋。天井部は平坦で、肩部に段を成してくびれる。口縁部は庇曲し、その端部は内傾気味に鳥嘴状を呈する。頂部の切離しは笠切りで、外反する輪状つまみを付け、内外面とも回転ナデの後、頂部外面と天井部内面を静止ナデとする。全体にぼってりとし、器高3.7cmを測り、内外とも青灰色を呈する。7は、器高2.2cm、口径14.8cmを測る蓋で、器形的には低いものの6と同形態である。8は頂部から口縁部にかけてやわらかく湾曲し、その端部は丸みおびる蓋。切離しは笠切りで、ボタン状のつまみが想定され、外面は笠ナデ。内面と口縁部は回転ナデの後、天井部内面を不整方向

のナデで仕上げる。9は、平坦な底部から開き気味に丸く立上がり、口縁端は外傾して尖る。高台の接地面はやや凹状を呈する。口径からみて6とセットになるものと思われる。10・11は、土師器。そのうち後者の口縁部は、ゆるく外反して短く、その器形は椀状を呈する。色調は赤褐色で、胎土に2.3mmの大粒砂を多く含む。12は、赤褐色を呈する土鍤。

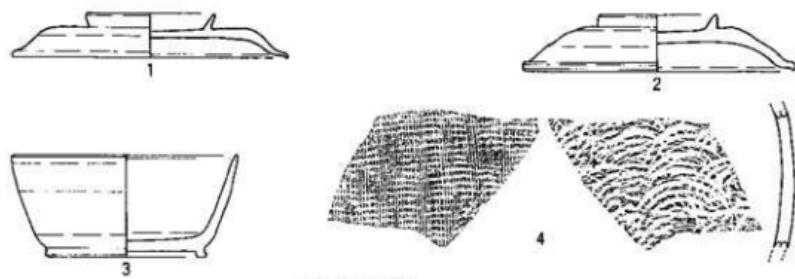
SI02住居出土遺物（第7図・図版8） 13は、壺の底部。底部外面は、頂部から「つ」の字状を呈して高台に至り、その接地面は内湾して尖る。切離しは範切りとし、内面は、回転ナデの後、中央部を不整方向のナデを施す。胎土に砂粒を含み、色調は灰褐色を呈する。14は、4層上位面から出土した椀状の壺。体部は底部から外傾して頸部の凸状部で斜めに立上がり、口縁部は外反し、その端部は唇状に丸みをもっておわる。高台は張り気味につばり、その接地面は内傾した鳥嘴状の断面をもつ。外面とも回転ナデで、色調は青灰色を呈する。おそらく金属製容器を模倣したものであろう。

SI03住居出土遺物（第8図・図版8） 15・16は、高壺の壺部。前者は脚部からゆるく丸みをもって立ち上がるのに対して、後者は平坦の底部面から斜めに立上がる。両者とも4層から出土したもので、白灰色を呈する。調整は回転の後、内面底部に放射状のナデを施し、後者には×印の範記号を有する。17～19は、いずれも4層から出土した土師器甕。そのうち17は、頸部がゆるやかに外反し、口縁部が長い。外面の調整は、いずれも頸部上半から口縁部にかけて横方向のナデであるが、その下半の胴部にはハケ目を斜方向あるいは輻方向に施す。内面は斜方向の範ケズリ調整である。

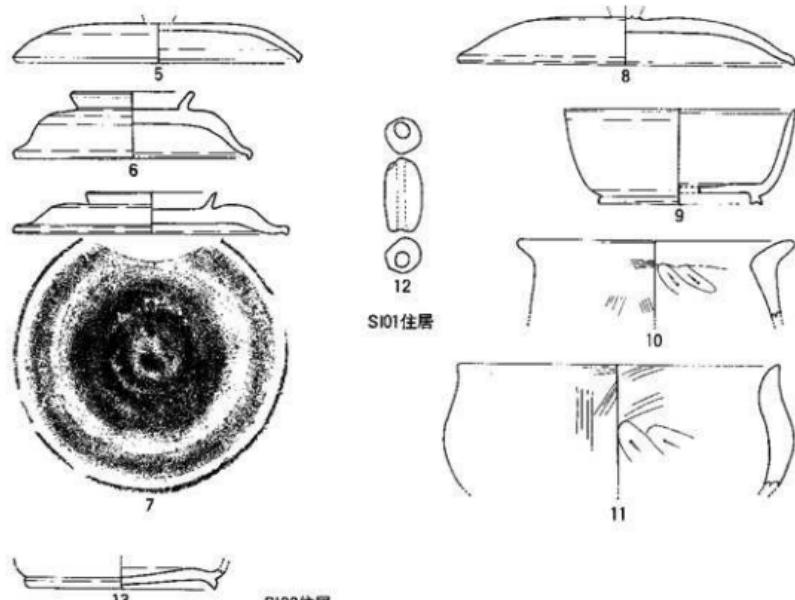
SI04住居出土遺物（第8図・図版8） 20は、4層から出土した繩文土器の口頸部。頸部は短く屈曲し、口縁部は波状を呈する。屈曲部分の頸部は館で調整した後ナデを施し、その部下に棒状施文具による凹線、また口縁部も波状部を仕切るように凹線を有し、その波頂部に対向の凹状の刻目を施している。型態的にみれば、おそらく岩田第4類でも終末の段階ではないかと思われる。

本遺跡からは同時期のものが數片出土しているが、その散在はSI05住居を中心とする南側に検出された。

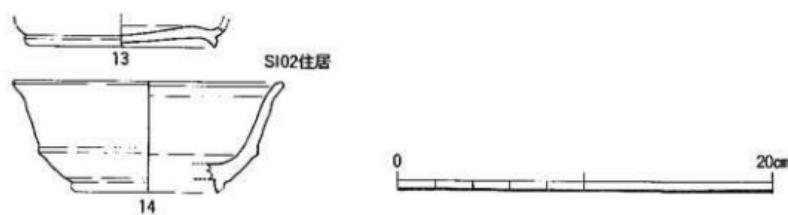
SI05住居出土遺物（第9図・図版8） 21は、酸化鉄が付着する3層に出土した壺状の弥生前期土器。頸部は短く「く」字状を呈し、口縁端は外面に丸みをもつ。外面ともハケ目で整形した後、外面には丁寧な横方向の範ミガキを施す。外面の色調は黄褐色を呈し、内面には煤が付着する。23は、3層から出土した土師質の小皿。外面とも回転ナゲで、回転糸切りで切離しを行う。色調は外面黄褐色、内面白灰～黄褐色を呈する。24・25は磨製と打製の石斧。前者は砂岩系の乳棒状磨製石斧で、全面を敲打で整形した後、刃部を蛤状に研ぎ出している。後者は頁岩系の打製石斧で、周縁部から數打の打裂を加え整形する。斧身は直系で凸刃を呈し、背面に自然面が残る。26は、4層上面から出土した釜。大井部は平坦で、肩部から下方に湾曲し、口縁部で段状に平になる。口縁端



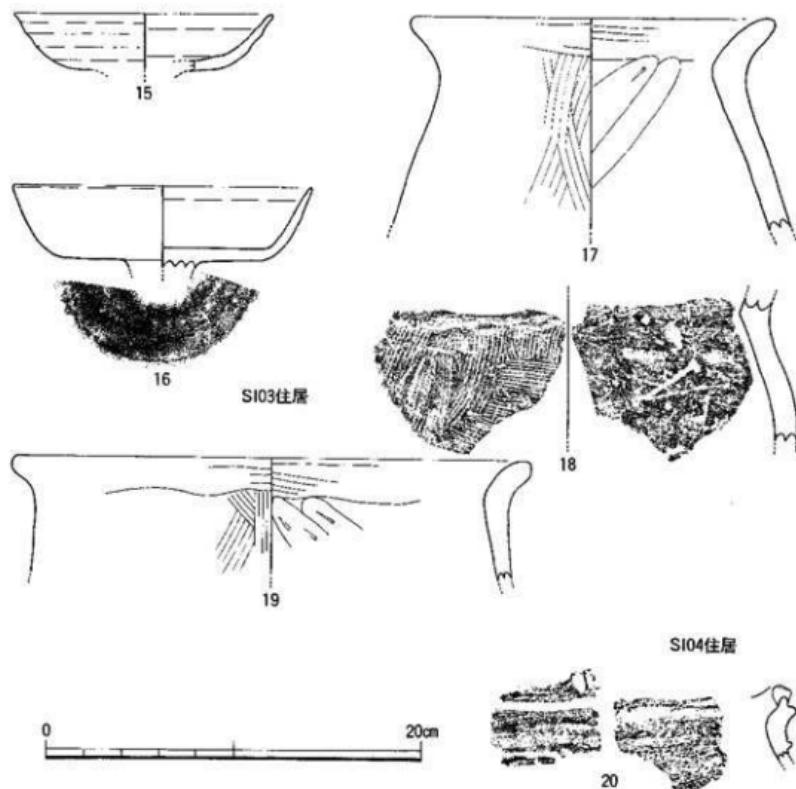
1. 2層出土遺物



SI01住居



第7図 遺物実測図(1)



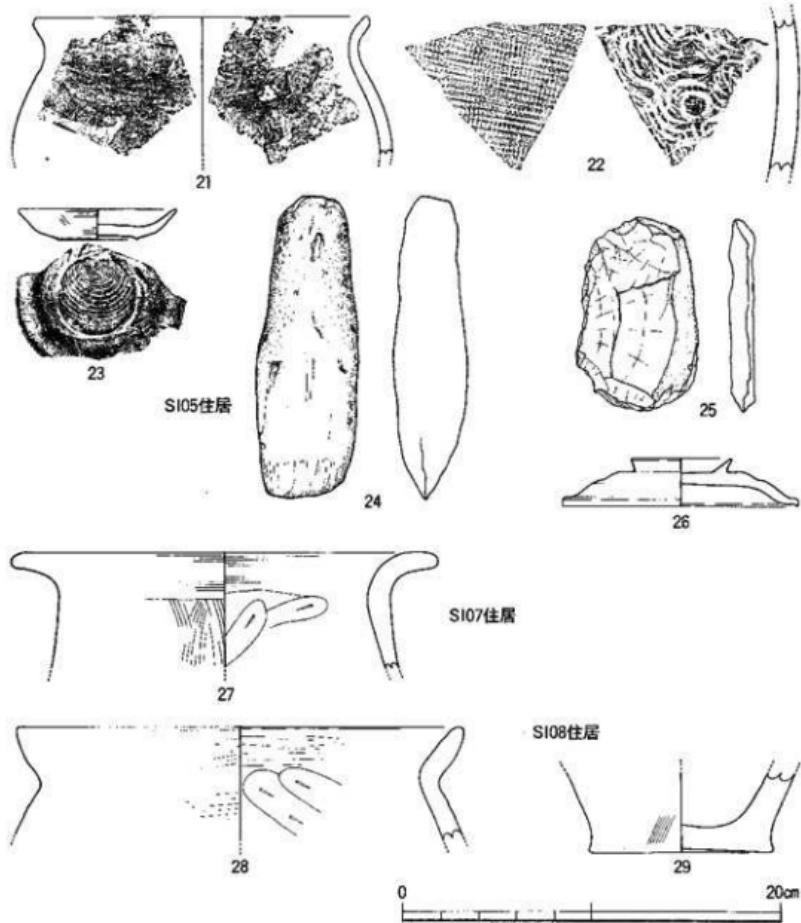
第8図 遺物実測図(2)

の外縁は垂直で、その断面は鳥嘴状を呈する。外面の天井中央部に丸く外反する輪状つまみを付け、口縁端まで回転ナデ。天井内面部は静止ナデとし、色調は青灰色を呈し、胎土に3~5mm大の砂粒を含む。切離しは箇切りの後、ナデを施す。器高2.6cm、器径12.5cmを測る。

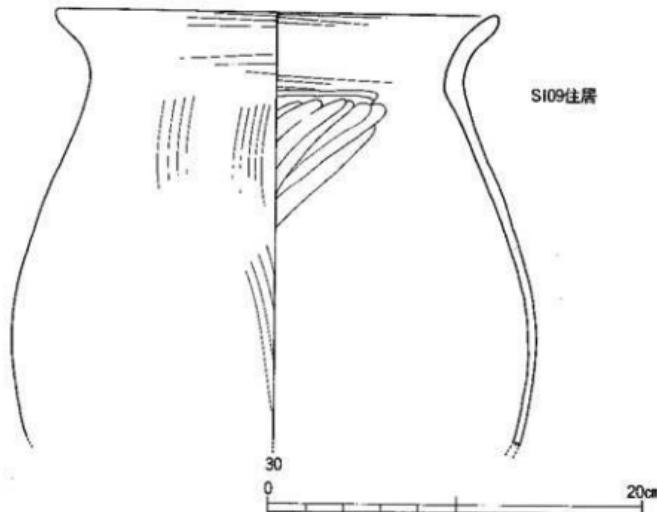
SI07・SI08・SI09住居出土遺物（第9図～10図・図版9） 27～30は土師器類。そのうち27は、頸部が強く屈曲し、口縁部が長く突出しその端部が丸みをもった彫状のもの。胴部は斜め方向のハケ目調整とし、口縁部内外面はナデを施す。28は、頸部が「く」字状をなし、口縁端に向かって斜めに尖る彫。色調は赤褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。29は、SI08住居4層上面に出上した平底の底部。胎土に5mm大の石英を多く含み、胴部外面にハケ目調整を施す。30は、SI09住居のカマ

D址に伏せるように出土した甕。頸部はゆるやかに「く」字状を呈し長い。口縁端部は丸く、胸部に比べて器肉は比較的厚い。胴部には斜向のハケ目を施し、その最大径は下半部にあり、形状から丸底と思われる。口頭部の外面は横方向のナデを施し、内面は箒ヶズリ。

SI10住居出土遺物（第11図・図版9） 31は、4層から出土した蓋。天井部はやや下がるもの肩部に向かって高くなり「へ」字状に口縁部に至り段をつくる。口縁端部は内折気味で、その断面



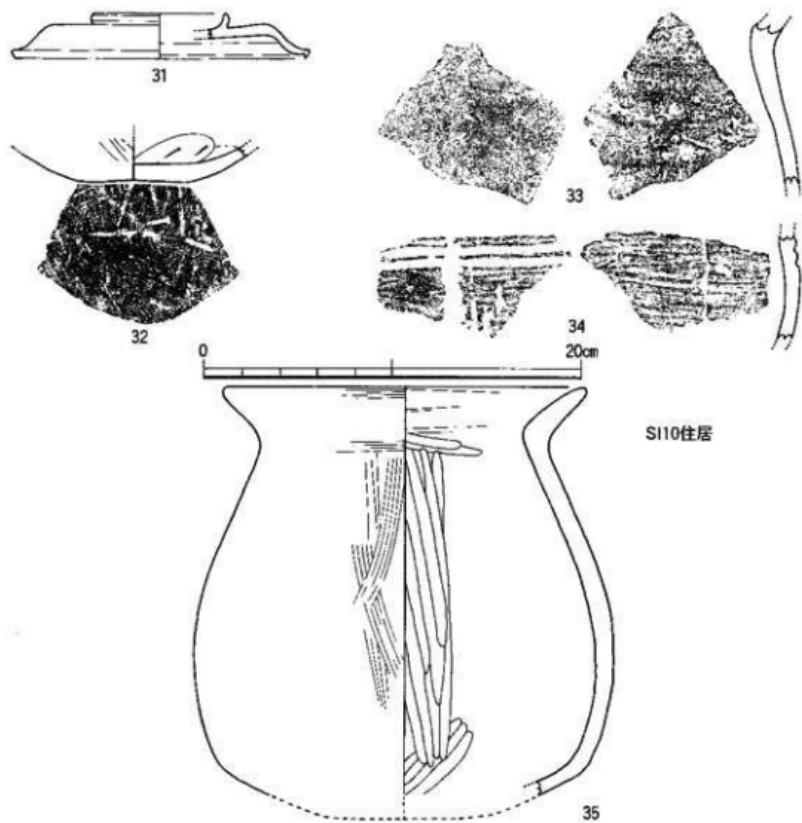
第9図 遺物実測図(3)



第10図 遺物実測図(4)

は鳥嘴状を成す。内外面とも回転ナデであるが、天井部内面は静止ナデ。外面に自然釉があり、暗緑色の光沢を呈する。32は、十節器の丸底。外面底部に一方々向のハケ目調整が施され、内面は粗い笠ヶズリ。33は、外面をハケ目、内面を笠ヶズリで調整した上削器で、茶褐色を呈し、外面に煤が付着する。34は、4層から出土した粗製糸の繩文土器。内外面を板状施文具で調整し、外面に3本の円線文を施す。色調は黄灰色を呈し、胎土に0.5~1cm大の石粒を含む。35は4層下位面から出土した丸底の土師器。最大径を胴下半部にもつ、頸部はゆるく屈曲し口縁は長い。外面の調整は縱方向にハケ目、口縁部は横ナデ、内面は縦方向の笠ヶズリとする。全体に黄褐色であるが、外面の胴下半部に酸化鉄が付着して茶褐色を呈する。口径19.5cm、推定高22.5cmを測る。

SI11住居出土遺物（第12図・図版10） 36~42は、SI11住居から出土したもの。そのうち36は、4層上面から出土した蓋。体部は輪状つまみが付く天井部は下がるもの、肩部に向って肥厚しながら上がり、屈曲する。口縁部はゆるやかに開き、端部に向かって極端に薄くなり、かえりは鋭くない。内外面とも回転ナデであるが、天井部内面は静止ナデで、灰褐色を呈する。37は、カマドの対壁の段状張出し部から傾斜して出土した高环。口径15.5cm、器高9.4cmを測り、ややズングリ形。脚部及び环部の体部は、全体的に丸みをもつて外側に張り出す。色調は白灰色を呈し、調整は回転ナデであるが、环部の底面は静止ナデである。38は、4層から出土した环で、高台部の器肉は厚いが、中央底面は薄い。切離しは笠切りで、外傾する高台の接地面は僅かに凹状を有する。39~42は土師器甕。

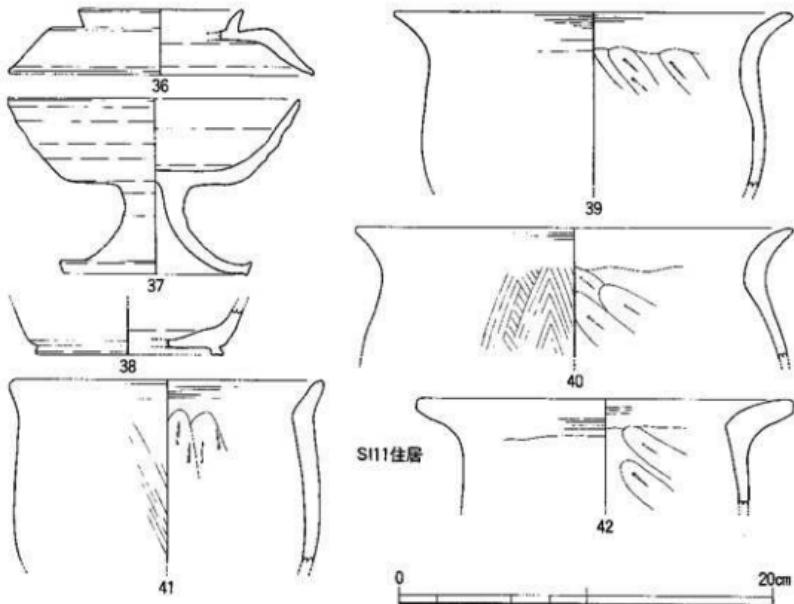


第11図 遺物実測図(5)

第5節 小 結

最後に、調査結果を要約してまとめておく。

5層の暗褐色粘質土に掘り込まれた方形・長方形住居址は11棟確認されているものの、上面層（4層以上）の後出期に捉えることができる掘立柱建物跡のプランについては把握することができなかった。それは掘立柱建物跡の生活面が上面層内の単一層で営まれていたと想定されること、また部分的に水田造営時に削平されたこと等によって、見逃したものと思われる。また竪穴住居面が5層の暗褐色土に掘込まれているとはい、上面層の4層中位面では既に竪穴住居期とセット関



第12図 遺物実測図(6)

係として捉えることができる遺物の包含からみて、その竪穴住居（遺構面）の深層は4層中位面～5層の暗褐色粘質土の2層に亘っていたと想定される。

竪穴住居形態については、壁際に柱をもっていたと思われるものがSI03・SI05・SI-11で認められているものの、他の住居の柱穴は同時期性に欠け、伴わなかったものと想定される。この2形態の新旧関係については、共伴遺物からみて前者が旧く、後者は後出の棒に入ると捉えることができる。それは方形→長方形への住居プランの推移とも重なることからおおよそ窺いしることができる。しかし住居に伴う石組カマドの形態については、そこに時間的差異を認めるることはできなかつた。

本遺跡の時期的設定であるが、絶対年代を決定する遺物が無い以上、特に上器を中心とした形式学的編年に基づいて考察するはかないであろう。しかし石見地域では今だ準拠すべき編年が確立されていないため、地域的にみて、また土器の形態的類似性から安芸、特に周防地方に親縁性を求め、蓋坏の特徴的形態から類推しておくことにする。

まず蓋においては、天井部が平坦となっていて口縁部が段を成してくびれ、天井部がドーム状を呈して丸く口縁部に移行し、その頂部に輪状つまみが付くもの。そして天井部がドーム状を呈して

丸く口縁部に移行し、その頂部にボタン状のつまみが付くという、大枠で2つのタイプが抽出できる。大半が前者のタイプであるが、の中でも微細にみていくと口縁端部や輪状つまみの形態に微細な差異が表出している。つまり、輪状つまみの径が比較的大きく、その着装の頂部がやや下がり気味で、扁平形を成していく傾向がみられる。しかし、いずれも天井部が平坦であること、口縁部への移行に類似性がみられること、調整方法が同一であること等から、きわめて偏狭期に捉えることができるであろう。これらの特定的形態から、地域的に輪状つまみの多出性という特殊性が表出しているものの、これを「防長地域の須恵器窯跡と編年研究⁽¹⁾」でいう8世紀中ごろから後半に比定されている「ⅣB」形式に対応するものとしておきたいと思う。

また後者の天井部分がドーム状呈するものについては、形態的にさらに2つに分離しなければならない。それは調整が籠ナデで、口縁端部が丸みおびたもの（第7図-8）、調査は回転ナデで、口縁端部が鳥嘴状を呈したもの（第7図-5）に分けられ、8は前掲の桑原邦彦のいう「歴史時代様式への転換期」のものとして捉えておきたい。また5は、前述を類推すれば8世紀前半期に落着くのではないかと思う。

环には高环と环身に分けられ、そのうち高环は环部の端部と脚部の裾部がよく張り、その形態からは本遺跡の想定時期を鑑みれば、古墳終末期ごろの所産ではないかと思われる。また环身においては、第7図-14以外、口縁部への立上がり傾向に変異はみられないものの、底部と接地面には時間差とも受けとられる差異が表出している。つまり高台着装部分が肥厚するタイプは、接地面が逆凹状成すのに対して、底面の器肉がほぼ均一化して平坦のものは、接地面も平坦であるという両者に差異が見受けられる。この両タイプを進歩的形態からみるならば、前者から後者への変遷として捉えた方が自然であろう。また佐波理範の模倣とみられる14は『平城宮発掘調査報告書』『奈良國立文化財研究所学報第26冊2⁽²⁾』に「ただし施Aの盛行は平城宮Vまでであって、平城宮VIには急減し、平城宮VIIにはなくなっている」という論拠により、これに地域間・7とのセット関係あるいは本遺跡の想定期を加味して、これを8世紀後半のものとしておきたい。

以上、時期的設定を大枠で捉えておくなれば、8世紀前葉から9世紀初頭のものと仮定し、その盛行期は8世紀中ごろから後半期にかけてのものと推論しておきたいと思う。

（渡辺友千代）

註

- (1) 桑原邦彦、池田善文 「山口県の土師器・須恵器」所収1981年6月 岐陽考古学研究所発行
(2) 小笠原好意、西 弘海 「考察 土器」昭和51年3月 奈良國立文化財研究所発行



1. 遺跡遠望(南東から)



2. 遺物出土状況(A区北西面)

図版2



1. SI03のカマドと石塊



2. 柱穴・溝状土坑検出状況(SI10・SI11周辺)



1. SI01のカマド(西から)



2. SI03のカマド(南西から)



3. SI04のカマド(北から)



4. SI06のカマド(南西から)

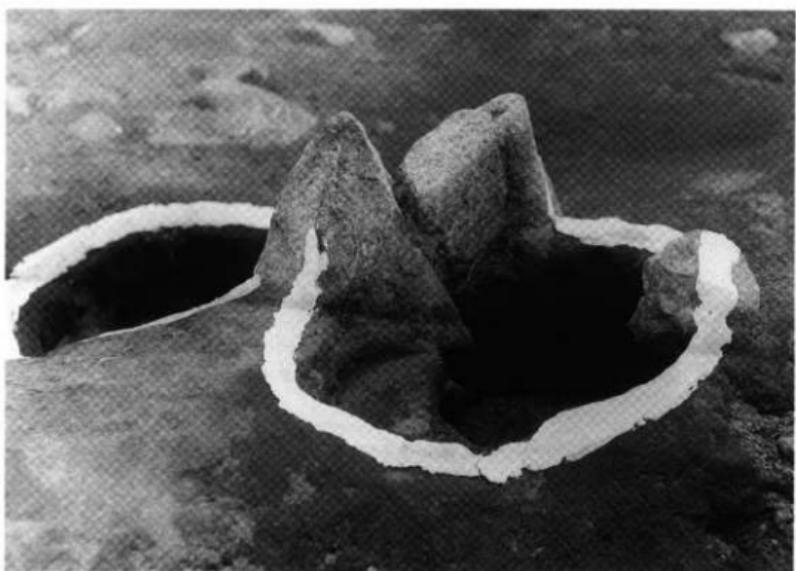


5. SI09のカマド(東から)

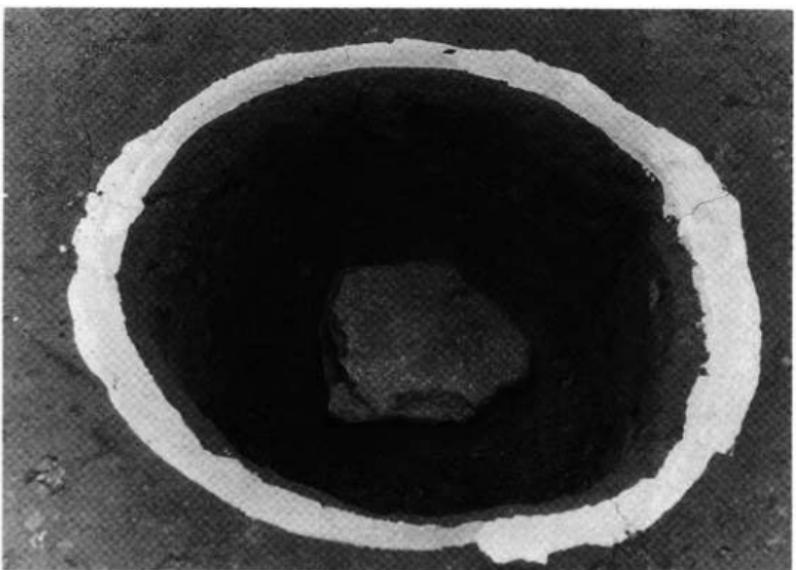


6. SI11のカマド(南東から)

図版 4



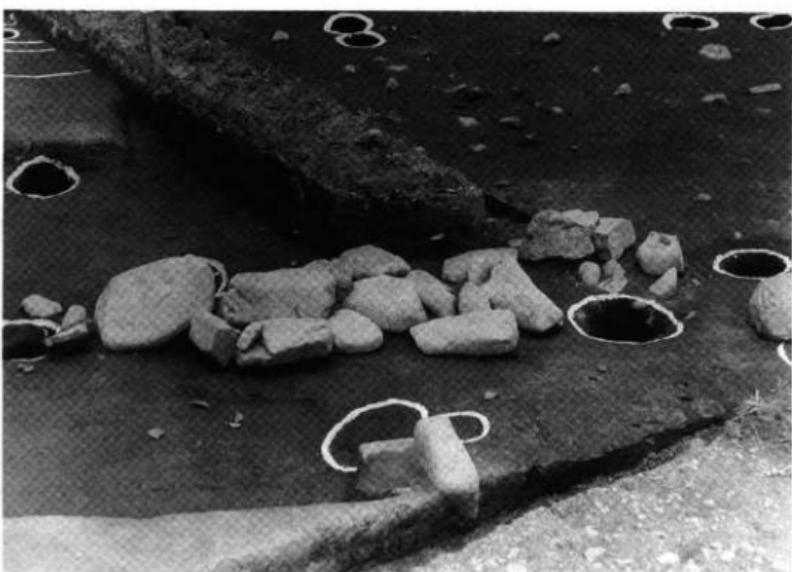
1. 捕強石検出状況 (P11-P05)



2. 級盤出土状況 (P98)



1. 北西から見たSI05完掘状況

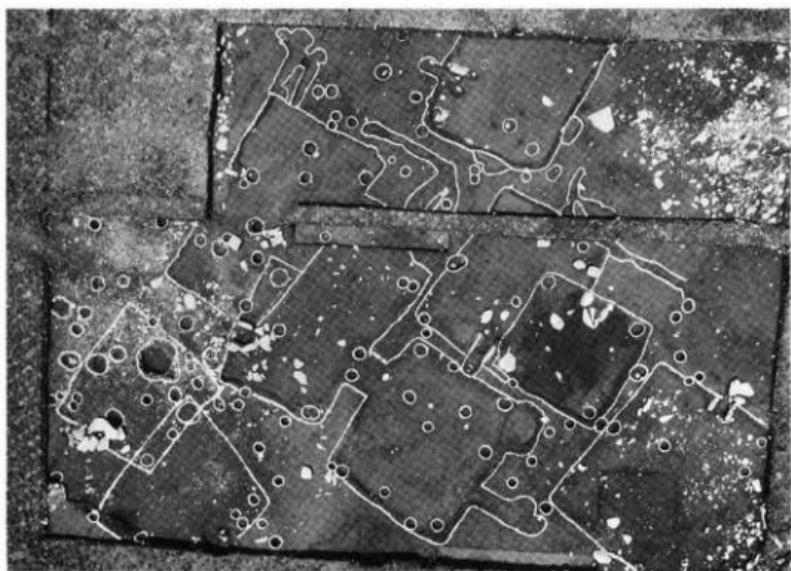


2. 北西から見たSI07石塊

図版 6



1. 西から見た完振状況



2. 気球から見た鳥瞰